

# 南知多町天神山遺跡の 紅村弘氏保管資料について

● 増子康眞\*・川添和暁

南知多町所在の天神山遺跡は、縄文時代早期末土器の標識遺跡として広く知られている。しかし、当時の調査記録がほとんど残されておらず、発掘調査の様子を追検証するには限界があった。そうしたなか、故紅村弘氏の保管資料のなかに、当時の調査の様子が窺えられる記録の一部が保管されていることが明らかとなり、経緯を含めて本誌に掲載することとなった。遺跡形成をはじめとする天神山遺跡の実態を解明する手掛かりになりうる資料から派生する意義について、主に土器について論じた。

## 1. はじめに 本稿の経緯と構成

筆者（川添）は、以前、小澤一弘氏が保管していた、南知多町天神山遺跡の調査メモについて紹介し、調査トレンチの推定を行ったことがある（小澤・川添 2018）。天神山遺跡の調査記録資料は、現在わずかな情報しか残されていない。いろいろな事情・経緯があったと思われるが、現地での情報を整理して、その限りある情報から、どのような調査が行われていたのかを公開し資料化することは、第三者による本遺跡の検討を行う上で、極めて重要な作業である。これは、かつての調査成果を埋没させることなく、現在行われている研究資料と同等の資料的価値へと高めるための作業でもある。

本稿は、後述のように、故 紅村 弘氏によって保管されていた資料が、増子康眞によって確認されたことを契機としている。天神山遺跡の発掘調査は、1956年、名古屋大学文学部考古学研究室によって発掘調査が実施された。出土遺物は、長く文学部考古学研究室の所蔵となっていたが、最近、名古屋大学博物館に移管され、現在、遺物の整理調査が実施されている\*\*。この故紅村氏保管資料自体、もとはこの名古屋大学調査資料の一部であった。

増子は、これまで故 紅村氏からさまざまな考古学的情報を伺っていたことから、この天神山遺跡についても、その発掘および整理調査の

経緯などを近くで伺っていたとのことである。増子からは、今回「発見」された件の資料の経緯についても、理由などが心当たりがあるなど、それを含めての文章化の契機としたい旨のお話を伺ったのである。筆者（川添）としても、経緯などの文章化は、当地域の考古学史を語る上で貴重な情報となると思い、現在の天神山遺跡資料管理者である名古屋大学博物館の門脇誠二教授と、移管前の管理者である名古屋大学文学研究科の梶原義実教授にご相談申し上げ、本稿執筆の了解を得たところである。まずは、両先生からご理解を得られたことを、お礼申し上げる次第である。なお、この「発見」された紅村氏保管資料についても、現在は名古屋大学博物館への移管が終了している。

文章化に際して、本誌となった理由は、筆者（川添）の先の小論を掲載したことにある。天神山遺跡の情報を発信するに、別の冊子に掲載されるよりは、できるだけ同系列の刊行物に掲載した方が良いのではという判断からである。

本稿の中心となる増子報告文は次節に掲載している。川添は、本誌掲載に向けた編集・加工と、土層断面図に関する検討を行い、これは文末に付載した。増子報告文の研究上のプライオリティーを尊重する姿勢を示すため、川添執筆部分とは明確に区別したところである。但し、参考文献の記載に関しては、増子・川添両者を一括している。（川添和暁）

\*名古屋考古学会

\*\*名古屋大学博物館では、HP上で資料リストが公開されている（<http://www.num.nagoya-u.ac.jp/data/num-l.html>）。また、その分析成果も明らかにされつつある（堀内・須賀 2021、廣瀬 2021、上峯編 2022 など）。

## 2. 天神山遺跡第1次調査の再検討

### 2-1. はじめに

紅村弘氏は2020年11月病を得て逝去された。愛知県周辺在住の考古学愛好者のだれもが知る『東海の先史遺跡』三部作は、くまなく地域を訪れて地元の研究者や好事家と連絡を取り、その知見や収集遺物を集成され、1957年の美濃編、59年の三河編、63年の総括編が刊行された。第二次世界大戦後に、考古学を国民の参加を得て発展させる目的で、『私たちの考古学』（現『考古学研究』）を定期刊行された岡山大学の近藤義郎教授は、『東海の先史遺跡』を論評に取り上げて、域内の未公開だった考古遺物を資料化し、広く知らしめる優れた仕事と評価された。さらに繊細な実測図と、卓越した写真技術を示したことにも言及されている。多方面で優れて傑出した研究者であったことは周知と思うが、この三部作に触発されてご指導をいただき、考古学へ導かれた一人としてご冥福をお祈りします。

ご逝去のあと、残された多くの研究資産の整理をお手伝いしたが、この中に「尾張 天神山」と記載のある封筒と、43片の土器片を入れた木箱が残されていた。いうまでもなく天神山は、早期末から前期初頭土器型式が多重層位で出土し、今も完存する極めて重要な遺跡である。

残された封筒には、手製のスクラップブック、師崎町地図、遺跡と遺物の写真および実測図数枚が収納されていた。スクラップブックには、A～I区の注記ある84点以上の土器拓影が貼付され、発掘時のトレンチ層位断面図（A～F区）のトレースした図などが挟まれていた。別に1955年8月2、3日に実施した試掘資料拓影。土器・石器他の遺物実測図とスケッチがある。さらに「宮西貝塚」「新津」と注記された各数点の土器拓影もある。

天神山遺跡は師崎町が主催して、名古屋大学考古学教室と地元の研究者によって1956年1月4日～8日の予定で発掘調査が行われた。発掘資料は名古屋大学博物館に保管される。

本遺跡の発掘成果の概要は、1963年の『東

海の先史遺跡 総括編』で紹介され周知されている。早期末の上ノ山式・入海式・石山式・天神山式・木島式類似の各型式が層位的に出土していること。また入海式に凹基鏃（注記に赤色チャート）・打製石錘・骨製尖頭器が伴う。石山式には打製石錘・礫器・平板石皿・骨製尖頭器・骨へら・骨鏃？が伴う。天神山式には打製石錘・礫器・骨製尖頭器を共伴したこと。オセンベ土器に伴う？土偶片等が図示されている。時期不明だが、白形土製品・断面楕円形の磨製石斧・鹿角斧・糸掛け加工ある角製釣り針軸片があること。他にはシカ・イノシシ他の動物と爬虫類の多くの骨角歯類、多量の魚骨と若干の貝類が残存するが、貝層の形成はなかったことが紹介されている。川添は早期の骨角器群の重要性に鑑み、図化して資料の検討を試みた（川添2018）。

上記の石山式層の平板石皿については、厚さ5.6×幅20×長さ22cmの砂岩製石皿として実測されていたので、トレースし掲載した（図6-77）。図下部の細線付近は摩耗しており、右上のドット付近は使用痕がないと注記がある。

1956年の発掘調査関係の記録や詳細地形測量図・層位断面図の所在が現在は不明とされている。現存する澄田正一教授（当時）の発掘メモには「12月27～28日（榑崎・立松・紅村）測量」とあって、発掘に先立つ詳細地形図が作成されたことは確かである（小澤・川添2018：3頁）。当然に発掘区の層位断面図も作成されたと推測される。

2005年に刊行された知多市楠廻間貝塚の報告書付載1に、増子は早期末の研究史と研究の現状を執筆したが、この参考のため『東海の先史遺跡・総括編』に、天神山遺跡の詳細な記述ができたのはなぜですか？と紅村先生にうかがったことがある。

お答えの要旨は「1951年の南山大学による入海貝塚の調査に参加し、56年に石山貝塚報告が刊行されて、早期末の土器編年が活発に論議されていた。この時代背景の中で、層位的調査が可能な遺跡で詳しく検討したいと考えていた。たまたま天神山遺跡の調査員に加えられ、発掘後に澄田教授から、報告に必要な整理を手伝うよう指示を受けたので着手したが、町から

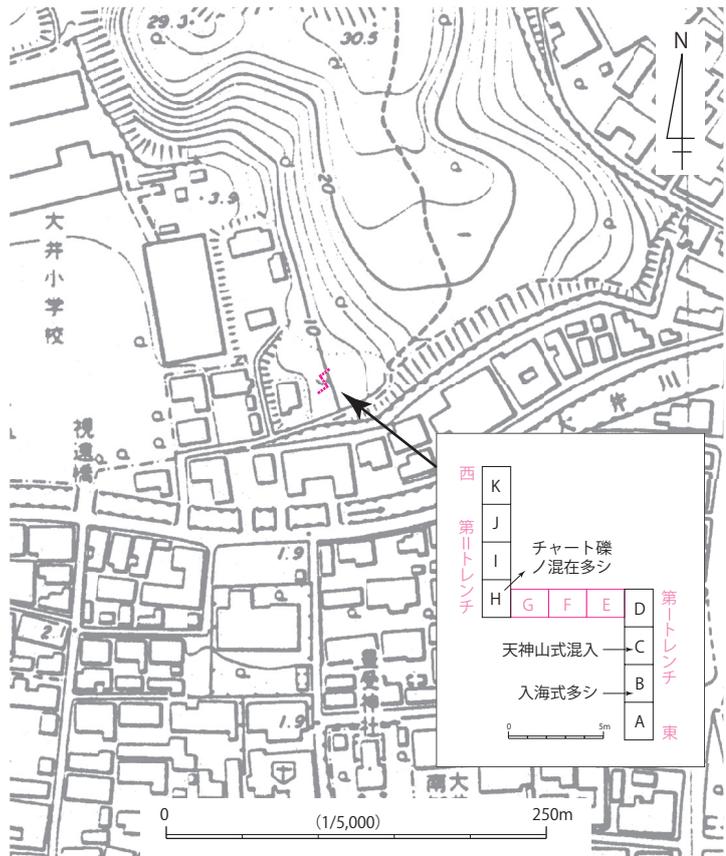


図1 南知多町内縄文早期遺跡(左) 天神山遺跡付近詳細図とトレンチ配置図(右)



写真1 天神山遺跡発掘前状況



写真2 測量風景

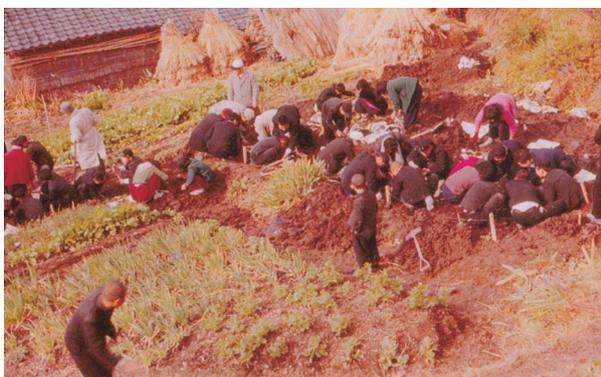


写真3 調査風景

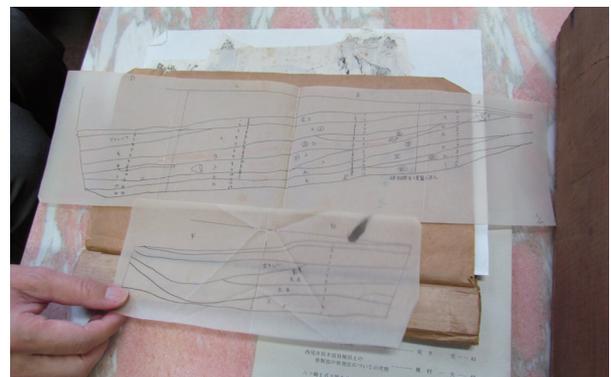


写真4 土層断面図もと 写真

の正式な報告書作成の依頼がなかったため、整理は中断された。

手許の土器片は埋め戻しまでの間、トレンチの壁に残された資料を、自身が確認し提唱した、石山式と天神山式の層位に基づく細別を検証する目的などのため採取した。その後『東海の先史遺跡・総括編』の作成を、澄田教授経由で名古屋鉄道から依頼された。報告書の作成が頓挫した経緯を知っていたため、この重要な成果の早期公開が必要と考えていた。今後報告書を作成する場合に支障のない範囲で、整理参加時の手許の記録の一部と、採取した土器片を加えて図・拓本やスケッチで概要を紹介した」とご教示いただいた。

以下では紅村資料の発掘時の層位断面図と、紅村氏の残された実測図や拓影、現存する土器片を資料化して、本遺跡についての新たに判明した事実を含めて、天神山遺跡の様相を検討するとともに、最近の研究動向についても言及する。今回南知多町社会教育課長の森崇史氏のご厚意から、故磯部幸男調査員の撮影したカラー写真を頂戴できたことを記し謝意を表する。(写真1～4・7)

## 2-2. 遺跡の立地環境 (図1)

知多半島先端周辺は砂泥岩からなる師崎層群を基盤とする急峻な地形となっている。三河湾から西へ湾入する、大井漁港のある入江に流入する大井川の谷は幅約200mで、北側の海蝕断崖は、標高約10mあたりまで立ち上がり、ここから標高25m付近までは緩斜面に変わる。標高25～30mの丘陵頂上付近は平坦面となって南東―北西に延びている。この稜線の西側に天神山・約100m北東の反対側斜面に塩屋遺跡が立地する。

天神山遺跡は、丘陵南端の海食崖の傾斜変換線上にほぼ接する位置で、標高約10m付近の緩斜面地形に包含層が厚く堆積している。ひろがり数百㎡程度と推定されたが、自然遺物と土器の量の多さから、発掘後の埋め戻しの土量が足らず、困惑したと紅村は回想された。稜線の北東に存在する塩屋遺跡はさらに小規模だが、天神山と同様な立地・環境にかかわらず、土器は多いが自然遺物は鹿角1片のみで保存の差が大きい。なお天神山と塩屋のほぼ中間の

丘陵上に製塩土器を伴う古代～中世の包含層があり、天神山B遺跡と命名されている。

大井港と丘陵をはさんで南に片名の谷があり、その南側丘陵には新津・向畑遺跡が存在するものの、ともに破壊に際しての発見で、十分な調査はなされていない。南北約3kmの三河湾に臨む知多半島先端の丘陵に、4遺跡が集中するがいずれも貝層を伴わない。

## 2-3. トレンチの位置と包含層の堆積

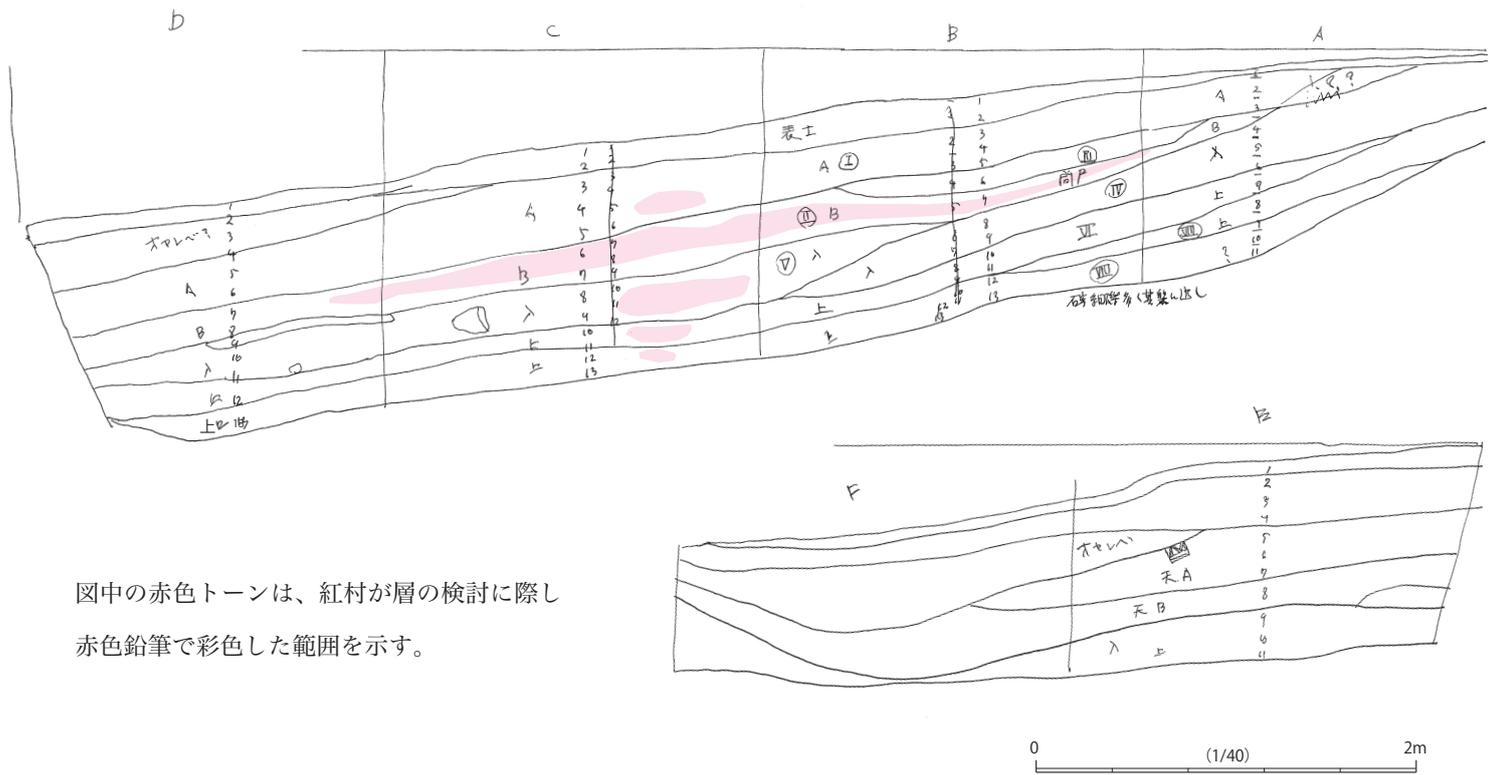
この調査では人工層位を設定した発掘方法を採用している。非貝塚である遺跡の性格と、2×8mのトレンチ内の斜面堆積だが、10cm区分であれば容易に原層位を復元できる、として試掘時に採用し、その結果から有効であると評価して本発掘でも用いたという。

澄田メモには、「上ノ山式→入海式→約10cmノ間層→天神山式 オセンベ式」とあるが、「東海の先史遺跡」には「間層」の用語はない。図2ではB区7層に間層とメモされているが、7層には斜線が入り、厚さが20cm以上あり「間層」ではなく、石山式層の強調と推測される。その上の6層はA区とB区にかけて薄い層を形成しているが、これが澄田メモの「約10cmノ間層」に相当するのではないかと推測される。しかし「入海式→約10cmノ間層→天神山式」の澄田メモには「石山式」層が欠如しているが、これらが間層とどう関わるか不明である。

紅村のトレースしたセクション図(図2)は縮尺1/20、第Iトレンチは2m単位でA区からD区に4区画され、トレンチ北側断面の測図と推測される。図からはA区が相対的に高く、D区に向かい緩やかに低くなるが、現在の斜面地形は北―東が高く、南―西に低くなっている。

磯部幸男の撮影した当時まだ珍しいカラー写真が残されていた。各方向から撮影されており、それによると、建物の壁から30mほど東に、ほぼ西北西―東南東方向に主軸を置くトレンチがクランク状に設置されている。家の位置から見ておそらく凹地形の中央に、第Iトレンチが設定されたと推定される。またE～F区は直角にDとつながる。

澄田メモによれば、第IIトレンチはH区～K



図中の赤色トーンは、紅村が層の検討に際し赤色鉛筆で彩色した範囲を示す。

図2 天神山遺跡 1956年A～F区トレンチ断面測図 (1/40)

区に区分されているが、『愛知県史資料編 考古1』の記述は、上層30cmに多量の遺物があり、その下層には第Iトレンチ1層土器が少量出土したとされ、攪乱が示唆されている。しかし紅村資料にはi7と注記がある石山式土器(図4-36)と、i10と注記ある上ノ山式?(図3-10)の存在から正常な層位状況で、攪乱のないことが推測される。第IIトレンチに攪乱されていなかった部分もあった可能性を示す。

考古学研究室からの移管を受けて作成された、「名古屋大学博物館 考古資料 天神山遺跡」の目録には、A～J区までの注記遺物が掲載されているが、K区名の遺物はない。

紅村氏保管のセクション図(図2)は、A～F区までが記載されるが、修正を加えつつある検討過程で、突然に中断された図であると思われる。土層の色調・土質の記入もわずかで、説明との対応も不明確である。第IIトレンチを含むG～K区の図はない。

図2の「1～13」の表示は10cm単位の人工層位で、ローマ数字I～IXは試掘時の層位を対応させたものと推定される。土器型式の略記は上=上ノ山式、入=入海式、B=石山式、A=天神山式と推定される。A区最下層の?は土

器(図3-1)にA11と注記がある。

『東海の先史遺跡』の層位説明は、「①.下位は粘質黒色土層で上ノ山式層」。「②.その上は約20cmの黒色土層で入海式を包含」。「③.その上は黄色砂質土層で石山式の単純層」。「④.その上は黒色土で天神山式層」。「⑤.(その上層)は木島式」とされるが、傾斜地のため乱れた部分もあったという。実際にA区では2,3層に上ノ山式や入海式が多く、上方にあった古い包含層が押し流されて再堆積した可能性を示唆する。

#### 2-4. 各区の層位と土器型式の状況

紅村資料の区と層位の注記ある土器について検討したところ、最も多いのはB区の40片、次いでE区の23片、注記のない20片、D区の14片である。A区の19片は多いが層位との整合性がなく、他の区は資料がすくないので除き、B/E/D区の層別土器拓影一覧集成図を作成した(図7)。また区/層別数値の一覧表を共に掲載した(表1・表2)。

B区:10層以下の土器はなく、9層は入海0式、同I、II式、と(集成図A最上段)右3例の石山式からなる。分厚い繊維を含まない大形土器(図4-35)がある。

表1 紅村氏保管の天神山遺跡土器点数

人工層位	区									
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	
1		1								
2	1	1			1					
3		1		1						
4				1	1	1				
5		1	1	2	1					
6	1	1		2						
7					2					
8		1	1							
9		2	3							
10					1					1
11	1									
12				1	1					
13			1							
不明		10								
計	3	18	6	7	7	1	0	0		1
総計	43									

表2 紅村氏保管の天神山遺跡土器拓影点数

人工層位	区									
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	
1		2								
2	14	2			1		2	1		
3	1	4			5			1		
4	1			1						
5		3			3					
6										
7					1					1
8		18		2						
9		3		3	4					
10				1	2					
11										
12										
13										
不明		10								
計	16	32	0	7	16	0	2	2		1
総計	86									

8層は入海Ⅱ式が約30%で他は石山式である。三条の沈線ある1例は天神山式とは異なる。「8層下部」と注記ある3片の石山式土器の内、集成図A2段目の右は、弧線状ないし円を描くような爪形列で描く。

6層は図4-28の石山式と図6-72の小型土器がある。

5層は石山式(図4-29)1例を含むが、天神山式が3例ある。3層から1層は石山式と天神山式の混在層と推定される。

D区:10層の(図3-4)は粕畑式と推定さ

れる。9層は入海Ⅱ式・石山式・天神山式各1例。8層は石山式2片。6～4層には同一個体の天神山式の大破片が分布している(図5-50)。3層は無文土器(図6-73)と天神山式が存在する。

E区:図2の層位は11層まで記載しているが、(図3-15)の入海式土器は「E12」と注記がある。同じ12層の(図3-5)は、集成図2段目中の10層条痕土器と共に、粕畑式に比定される。右端は入海式か。9層の右端は上ノ山式、入海Ⅰ式とⅡ式、下は石山式。7層に天神山式1例(図5-47)と石山式がある。5層は石山式2片と無文土器。4層(図6-75)は楠廻間式、3層は天神山式、楠廻間式と塩屋式である。2層は入海Ⅱ式と天神山式である。図2の「天A」土器片は(47)を指す可能性がある。この「天A」層を上から切るかたちの層に「オセンベ」と記入があり、E区3.4層と注記ある紅村資料は楠廻間式・塩屋式土器で、天神山式との層位関係を明確にできたことを強調したメモとも推測される。

この発掘では主に中学生を動員した調査で、人工層位別の遺物回収でかなり混乱はあったが、調査員の現場での観察では主要部分の包含層は、層序の乱れや土器の混在は少なかったと紅村は強調された。

## 2-5. 層位区分の傍証

調査員であった磯部幸男は層位について「昭和31年…調査員として参加していた紅村弘が、試掘層準Ⅳ・Ⅴ層(天神山式…増子補記)の単純層と、その直下の黄褐色砂層に爪形文土器の単純層を確認したことをもとに、石山式土器として一括されてきた爪形文土器と横線文、波状文とを分離したもので、以来……石山式→天神山式の推移は一般化されてきた」と記している(磯部1984:7頁)。この黄褐色砂層は紅村が細別の論拠としたが、磯部も調査時確認していたことを示す。また試掘層準Ⅳ・Ⅴ層が天神山式の単純層であることは、試掘資料報告に「天神山式土器のみが検出されている」と立松は記載している(立松・山下1983:55頁)、一連の事実関係は調査者間で共通認識だったと推測される。以上の概観で石山式→天神山式→オセンベの層位的変化が検証されたことは確認でき

る。

だが上ノ山式に続く入海式は、現在3型式に細別している(増子1983b)。発掘と同じ1956年刊行の石山貝塚報告で、坪井清足は入海0式を上ノ山式に含めていたが、紅村は天神山遺跡の土器編年配置で、入海0式を上ノ山式と入海I式の間においている。後に「君(増子)が入海0式の複数条突帯は上ノ山貝塚にはなく、上ノ山式と分離すべきと主張していたが、出土状況もそれを追認する状況であったのを考慮して、配置した」と伺った。増子の入海式三細別の提起は事実の検証が遅れたが、紅村は天神山の発掘時に、すでにその層位的変化を捉えていたことになる。

## 2-6. 天神山遺跡の形成期

県史は、本遺跡の最下層に上ノ山式土器の層があり、この時期に居住が始まるとする。しかし「但し調査が最下底の岩盤までおよんでいない」(紅村1963.P-103)、との指摘があり未発掘部分を残したことを示唆する。図2の層位図で、A区11層下に「礫・細礫多く基盤に近し」との記載があるが、11層の左の「?」は型式名称欄であり、不明土器型式の存在を示唆している。紅村土器資料の「A11」と注記ある土器(図3-1)が該当する可能性が高い。

これは素地に長石、石英、雲母が多く混ざる花崗岩のばいらん土(サバ土)を含む。庄内川から矢作川水系の縄文土器一般に共通する胎土で、繊維を含むが器壁は5~7mmで厚くない。色調は暗い茶褐色。信州や関東からの搬入ではなく、愛知県内での製作品と推測される。

器形は深鉢胴部片で上下幅65mmの段をつくり、器面にLr縄文を施した後に、幅12mmのへら?で横位に二条の浅い凹線を描く。下部凹線の下に沿って刺突列を加えるが、直後のナデで左下の文様は消されている。典型的な茅山下層式土器である。壁面からの引き抜きのためガジリはあるが保存は良好。天神山遺跡の形成期を確定する新知見である。

(図3-2)は区層位の注記はないが、器壁は7~9mmで繊維を多く含む。器面は保存が良く、破断面も新鮮。深鉢の波状口縁部分で、口端面に連続刻目を加え、口縁に平行に細かい刺突列を二条、その下に波状の刺突列を描く。波



写真5 天神山遺跡出土茅山下層式土器(図3-1)

頂部の内面に指頭による押圧を加え台形状に加工する意図がうかがえる八ッ崎I式土器\*である。茅山下層式末の吉井城山最下層に共伴することが報告されている(岡本1962)。

試掘区最下層のIX層出土(図3-3)は薄手の平滑な器面に、上下の横位刺突列間に、斜位の二条単位の刺突列を配置する小片であり、細かい刺突痕列文様は上ノ山式の貝殻復縁文土器に比定されたが(立松・山下1983)、本例はまぎれもなく八ッ崎I式である。

なお、試掘資料報告土器番号と、残る紅村拓影資料の土器番号はすべて一致している。調査者間で共有されていた情報と思われる。

紅村拓影資料にD10と注記ある土器拓影(図3-4)は、詳細は不明だが口縁部に横位の条痕調整を加え、口端面と口縁に横位と斜位の刺突列を加える。2に類似しており、八ッ崎I式か古い粕畑A式(増子2001)のいずれかに相当すると推測される。D区は包含層が厚く13層まであり、注記の資料は11層直上に描かれた方形の可能性が高い。

5はE10を12と注記の修正がある。土器は繊維を多く含む黒灰色の素地で口縁施文部は平滑に、以下は右傾に二枚貝条痕で調整し、内面も横位の条痕調整である。器厚は平均7mm。口縁部に左傾・右傾・左傾の刺突帯を三段描くが、この原体は石山式に多い薄いへらや二枚貝縁端ではなく、断面三角形の厚く鋭い刺突である。口端は縦に刻む。これらの属性は粕畑式土器の特徴と一致する。

なおこの発掘は8日までの予定であったが、博物館目録によれば9日にC・D・E区の12

\*八ッ崎I式土器について静岡県埋蔵文化財センターの報告書に、「八ッ崎式土器」と略記する例があると聞知した。「八ッ崎式土器」とは大参義一により、上ノ山式→八ッ崎式→入海式という型式変遷が示され、定義された型式名称である(大参1963.P.27)。筆者は大参氏の命名された「八ッ崎式土器」名称を尊重し、本貝塚出土の粕畑式直前の別な土器群に八ッ崎I式土器と命名し弁別を図った(増子1983a)。この学史上の事実を知らずに、上ノ山式に続く八ッ崎式土器と、粕畑式に先行する八ッ崎I式土器を混同する誤りを避けるため、注意を喚起する。

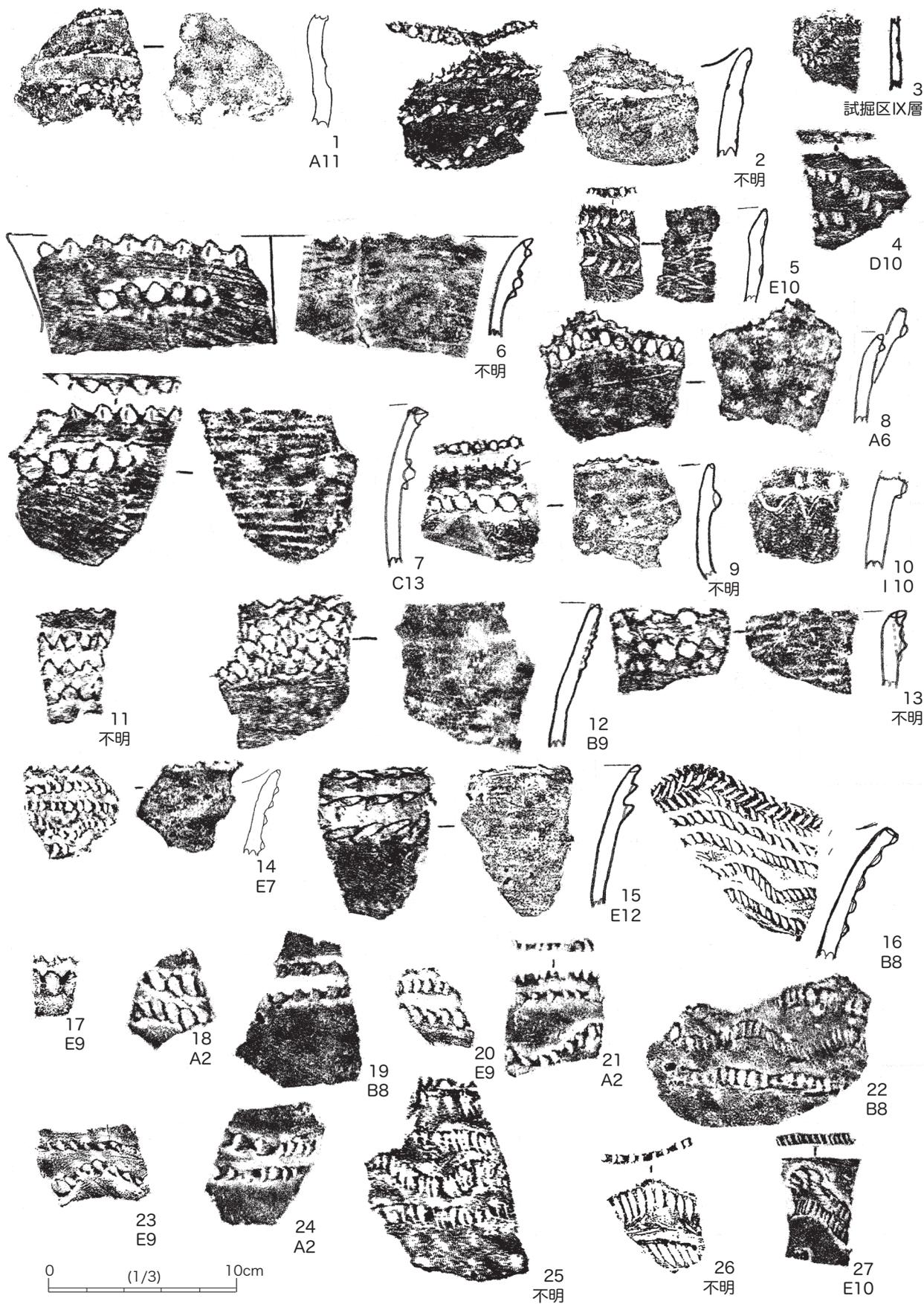


図3 天神山遺跡の土器 (1)

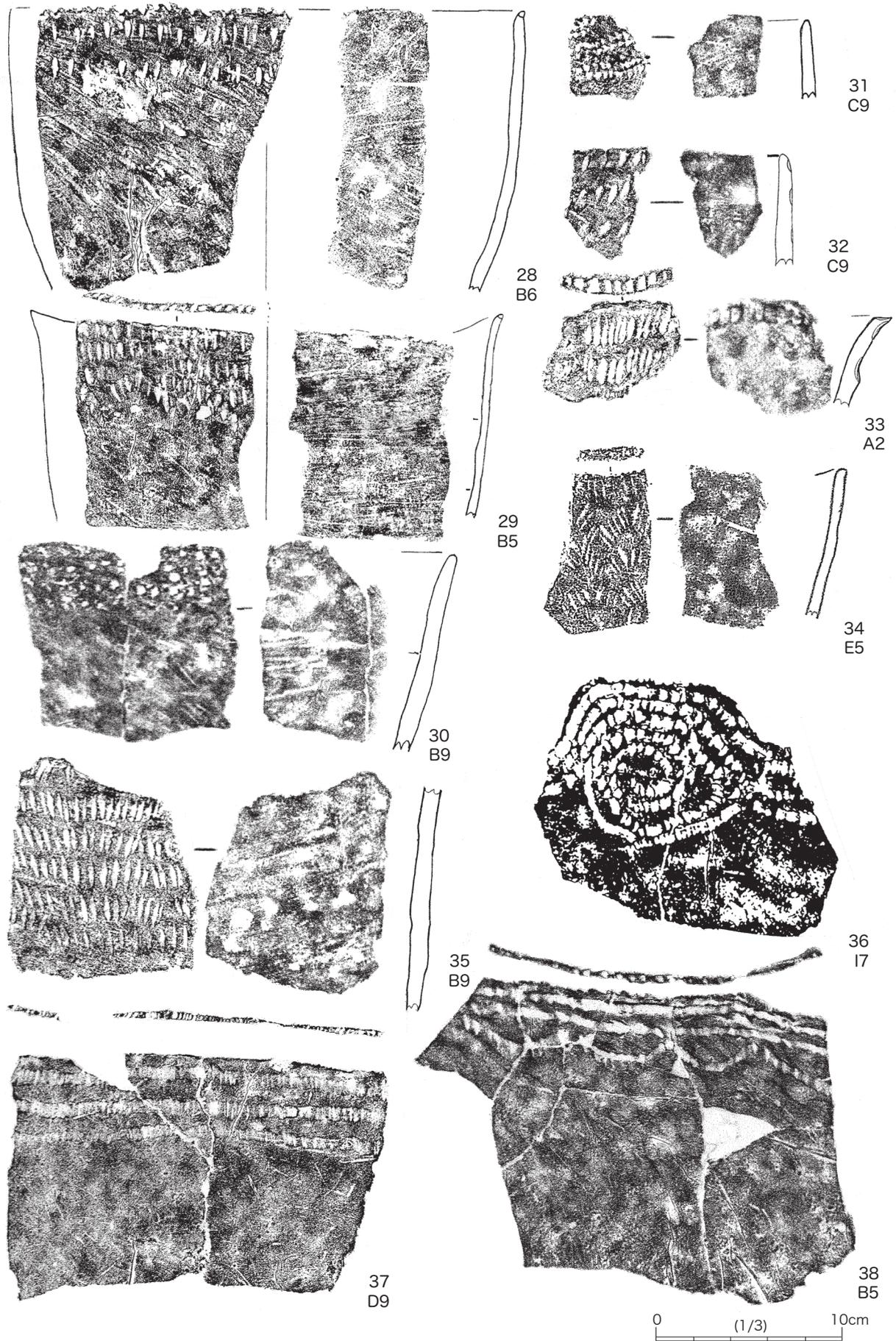


図4 天神山遺跡の土器（II）

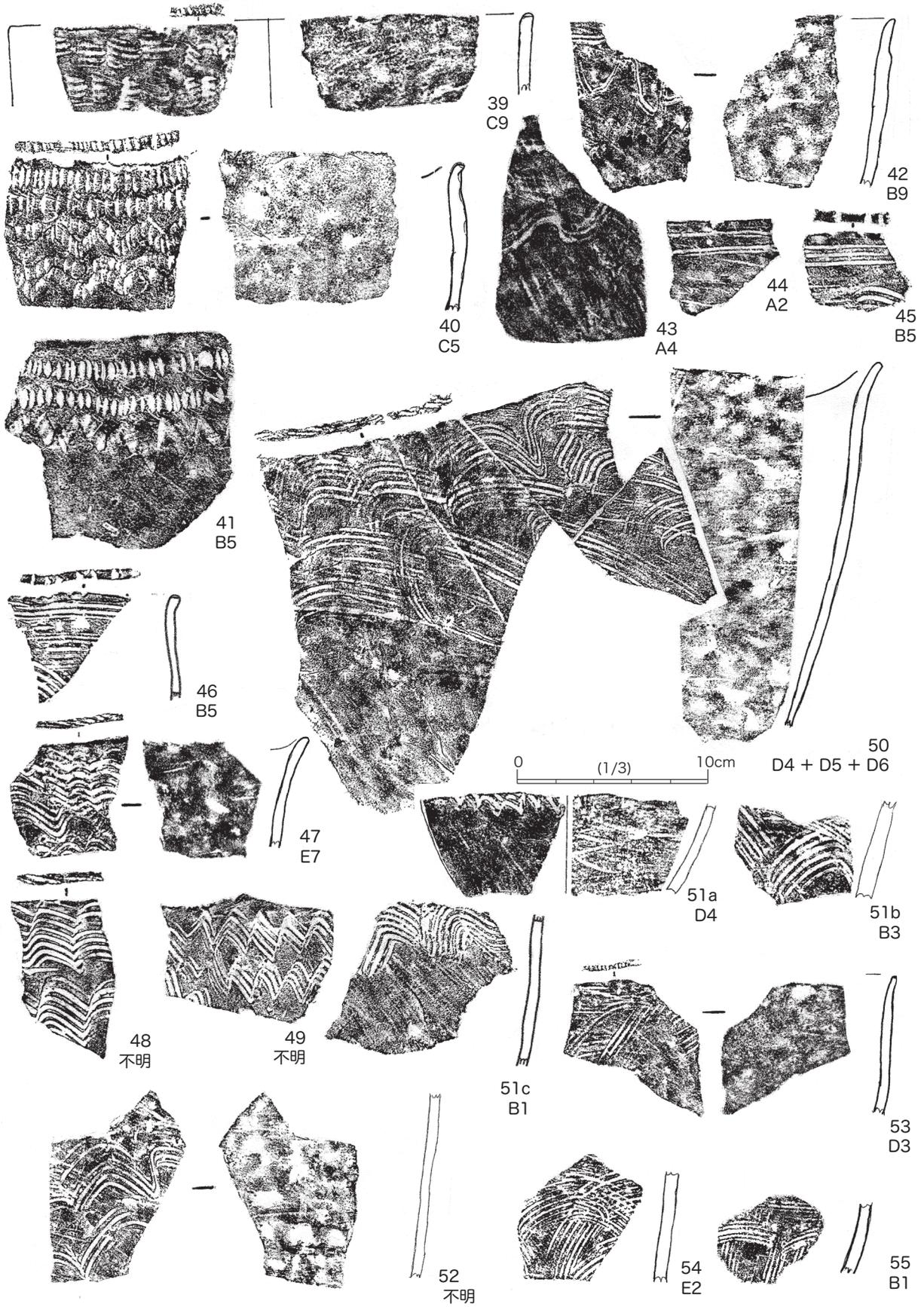


図5 天神山遺跡の土器 (Ⅲ)

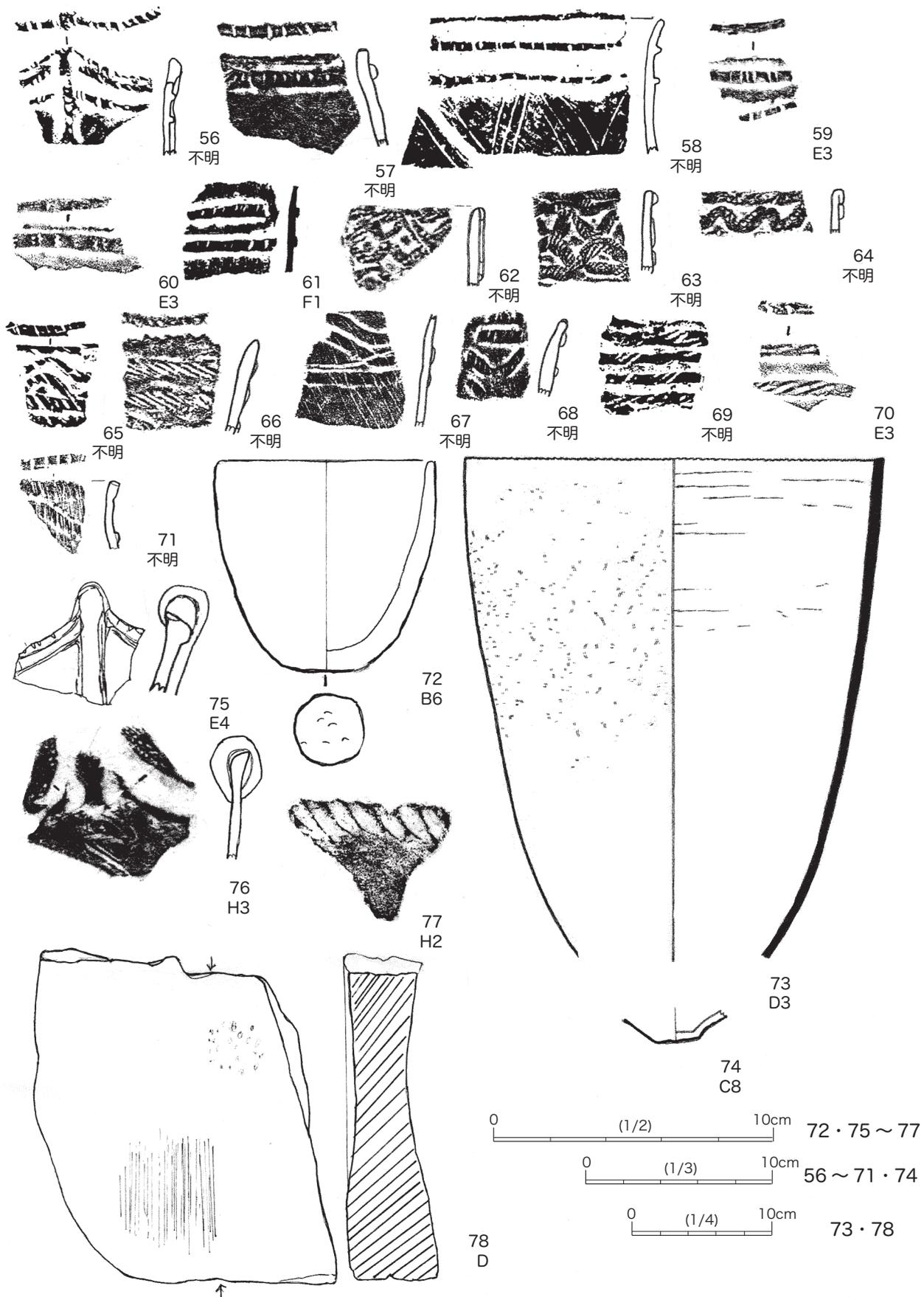
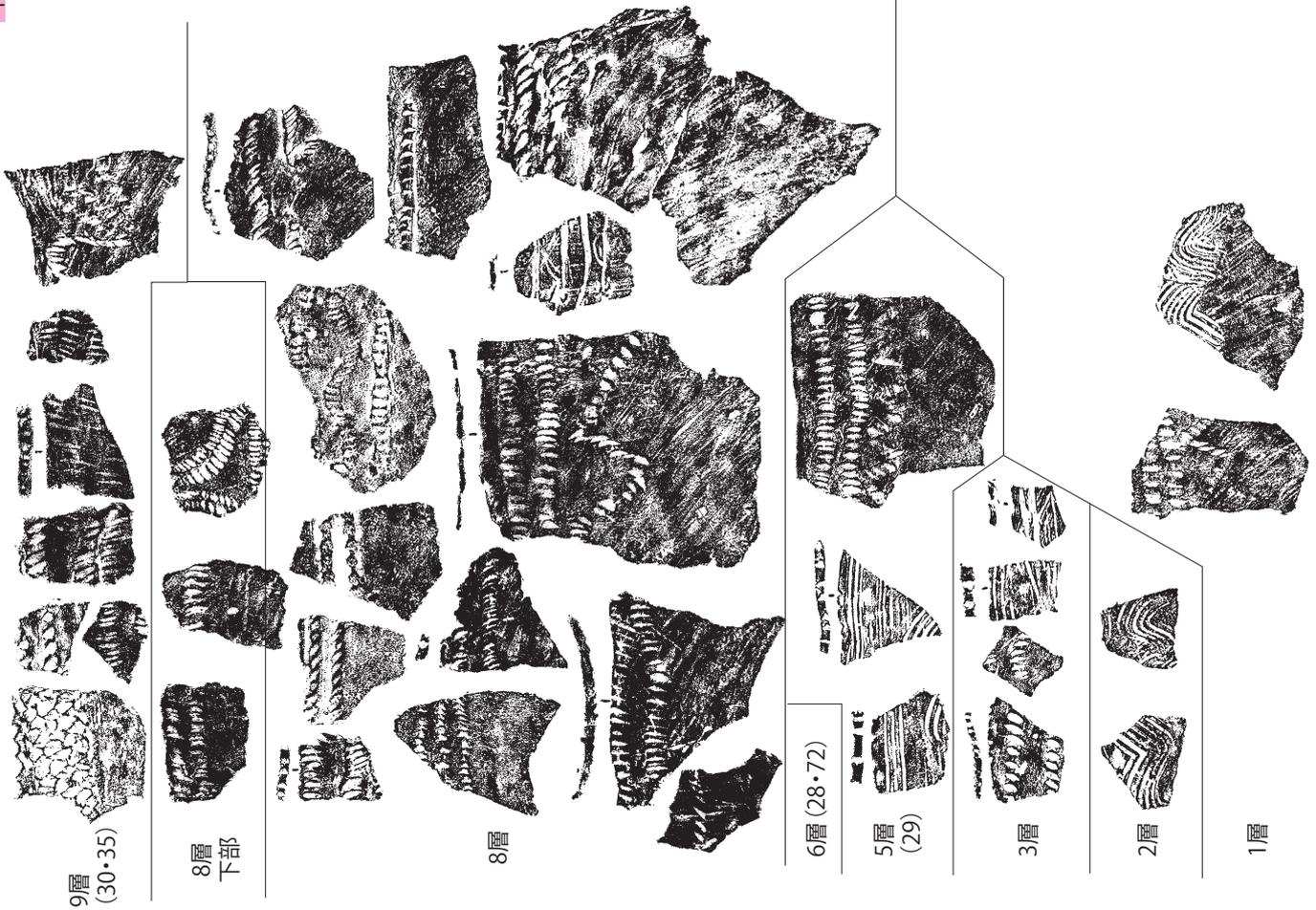
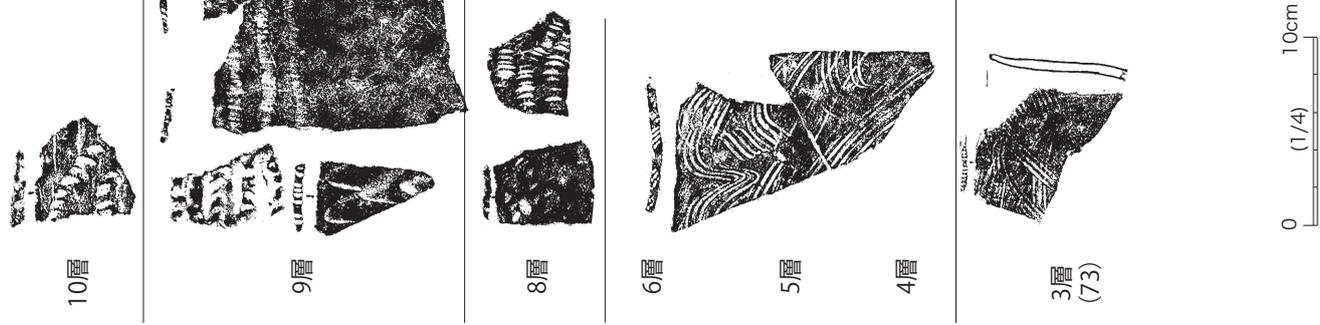


図6 天神山遺跡の土器 (IV) / 石器

B区



D区



E区

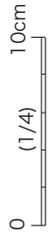
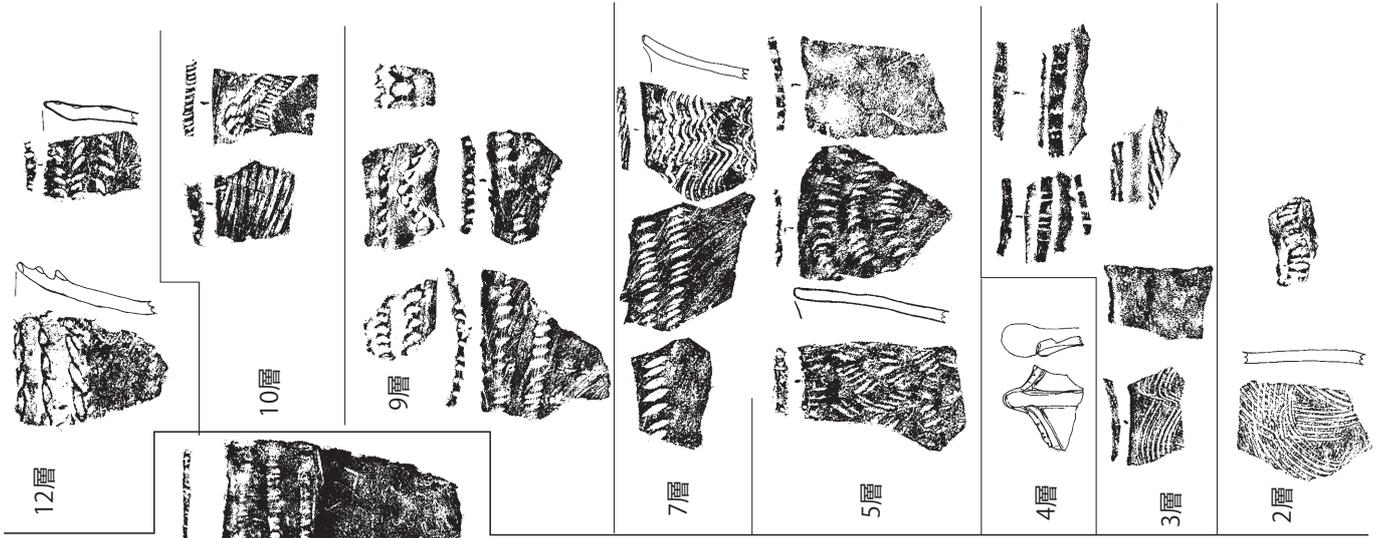


図7 紅村保管土器拓影の層位別一覧

層や最下層 13 層を発掘している。推測ではあるが、上記の知見にない土器の存在を知って、出土区のさらに深部を発掘し、資料を集める努力をしたかと推測される。しかし当時粕畑式までの認識はあったが、それ以前の土器様相は不詳であった。検討を果たさぬまま保管されたと思われる。

久永春男は知多半島先端の早期末遺跡群を総括検討して、その形成は上ノ山式からと述べている(磯部ほか 1965)。だが、紅村資料から観察した天神山遺跡の居住は、茅山下層式・八ツ崎 I 式・粕畑式土器に遡及することが判明した。開地遺跡で 10 型式以上が絶えることなく長期存続する天神山遺跡は、地域を代表する拠点集落であったと思われる。

天神山遺跡の終末に関しては 1963 年当時、オセンベ・木島式類似と表現する土器の編年はなされていなかった。紅村資料の終末期は後述で検討する。

## 2-7. 紅村資料の土器 (A~H は区・数字は出土層位を示す。? は未記入)

以下に紹介する土器は、①. 土器片に墨で注記のあるもの、注記のない土器片、②. 拓本のみがあり、鉛筆による注記のあるものと、ないもの双方がある。断面測図を入れたものが一部ある。ここでは①を主に掲載するが、②も必要と判断した例を図示している。

上ノ山式土器(図 3-6~10.17) 紅村氏の収集された上ノ山式土器は、押圧痕を加えた一条の把手状の短い突帯を二ないし四単位口縁部にめぐらす 6(?) と 7(C13) では、口端面と口端に水平に交互刺突した指と爪の痕跡が残る 6 と、口端の内外から交互押捺の 7。口縁部に指頭押捺ある一条の突帯を口端に平行にめぐらす 8(A6) と 9(?) 17(E9) がある。胎土には繊維を含み、器面はハイガイ等の背面条痕で調整される。

上ノ山式土器は一条突帯土器が主体であるが、ヘラ描の斜線帯や羽状沈線帯の系列と併用

されることもある。粕畑 C 式土器の主体である刺突列土器が 10% 程度残存するのが普通である。少ないが縄文施文もある。これらの多様な系譜と、底部資料は紅村資料には含まれていない\*。

図 3-10(i 10) は繊維を少し含む胎土で、当地に多い雲母・石英・長石を含まない。色調も白色に近く緻密な胎土は異質で、搬入品と推測される。押圧ある突帯の下に割れた原体で波状沈線を描く。突帯の貼付法は上ノ山式的だが、i 区 10 層出土で他の型式との共伴関係の情報もない。川崎市新作 D 貝塚(渡辺・村田 1966) に相似例をみるが、つながりは不明である。こうした早期末の異系統土器は知多半島に、ほとんど類例はない。

入海 0 式土器(図 3-11~13) この型式は入海貝塚の南山大学報告で 2 類 A 類に分類され(中山・稲垣 1955)、先行して入海貝塚を調査された、吉田富男が入海 A~C 式に分類した土器(吉田 1954) とは異なる特徴を有するとして留意されている。前述したが石山貝塚報告では 2 類 A 類を上ノ山式に含め、入海 A 式と同 B 式を入海 I 式・II 式とする。

増子は各遺跡資料を検討した結果、入海 2 類 A 類土器は、上ノ山式の突帯一条限定に対して複数条を用いる入海 I・II 式と共通すること、一方で上ノ山式特有の突帯の交互押圧法を多用し、口端面の押圧も引き継いでいる。だが、縄文施文と粕畑式以来の刺突列文という伝統的な要素は、上ノ山式までは存続するが、複数条突帯の出現を契機に消失する。

以上の状況から入海 2 類 A 類土器は、上ノ山式直後に位置付けられるべき型式であり、複数条の交互押捺突帯の出現を指標として、入海 0 式土器と命名した(増子 1983 b)。

11 は交互押圧ある突帯三条を平行して重ねる。12(B9) は突帯四条を密接に貼付して交互押圧を加えている。口端部の押圧は上からの単独押圧である。13(?) は二条を密接して

\* 上ノ山式土器の詳細な検討は「楠廻間報告」 付載 1 に論じたので参照いただきたい(坂野ほか 2005)。



写真6 28器面写真(150%)

口縁部に配置するが、上の突帯は剥離している。口端部の押圧痕は上と横から交互押圧する。

入海Ⅰ式土器(図3-15・18・19) 紅村資料に入海Ⅰ式の資料は少ない。15(E12)は口端面と二条の突帯に斜めに棒を押し当て連続する押圧する。18(A2)と19(B8)は指頭痕である。

入海Ⅱ式土器(図3-14・16・20~27) 14(E7)は口縁部に平行する二条の突帯・下に蛇行する一条突帯・下限に横位一条突帯を配置する。突帯には密な刻目を加える。16(B8)は口端と直下に羽状沈線を描き、四条の突帯の三条目を蛇行させる。突帯上は右傾の密なへら刻目を付す。共に入海式の典型的な文様構成である。20以下に拓本資料を掲載した。

石山式土器(図4) 石山式土器と天神山式

を細別した提唱者であり、情報量が多い。

文様面では、33(A2)は入海Ⅱ式の突帯が消失した直後の様相をとどめ、形式的に最も古い石山式の様相を示している。口端を刻む28(B6)は単純な二条横位の施文。34(E5)は刺突列の上一列と最下段は横帯で中の二列を連続波状に貼付する。同配列は入海Ⅱ式の25と同一であり、押引文で描く横位3列の37(D9)と、下の一列を波状とする38(?5層)は大破片で、磯部・山下の塩屋中層B式の典型だが、層的に28や29の刺突文列と相伴している。石山式は入海Ⅱ式の文様を選択的に踏襲するが、以下の様相の違う土器を含む。

36は口径を実測した線が残され、台形の把手の渦文直下で口径約14cmの小形土器である。出土層は「0i7」メモされており、第Ⅱトレンチi区7層と推測される。紅村が目にしたのは渦巻文を押引爪形文で表現したことであると推測される。石山式土器に渦巻文を表現する土器は類例がないが、図7のB区層位別出土土器一覧の上から二段目「8層下部」の右端例は二列単位で下に横位帯状、その上に対弧状に描くが波状ではなく、別な文様と推測される。「8層下部」はすべて石山式土器で、この類例の存在から紅村は石山式と判断した可能性がある。

72(B6)は口径8cmの小型土器で平底に近い底面に不規則な刺突痕がある。30(B9)は刺突痕を4段施す深鉢、同じ35(B9)は繊維を含まない?厚手の白灰色の土器で、胎土とつくりは石山式一般とは感覚的に異なる。石山式では6段以上の刺突列を重畳する例はないが、両者ともB区9層出土で、石山式包含層の範囲に収まる。

28(B6)の中央上の剥離した胎土表面には、長さ13~20mm、幅1.5~2mmの短冊形の炭化物が方向を揃えた状態を観察できる。本例の器壁厚は平均6mmであり、本遺跡の八ツ崎Ⅰ式~上ノ山式の器厚が平均約10mm程度であることに比較して、薄く軽い方向への改良が認められるが、依然として含繊維土器であることを証明する資料である(写真6)。

天神山式土器(図5) 口縁部に櫛やハイガイなどを原体として、幅広く波状文や弧線を横

位方向に描く 47 (E7) 48 (?) 49 (?) 50 (D4 + D5 + D6) など、櫛描文系譜の深鉢が主体となる組成である。加えて、入海式以来のモチーフや、石山式の施文法が残存し共伴する。40 (C5) 41 (B5) は横位爪形文帯下に波状押引文帯を描き、石山式のモチーフを継承する。42 (B9) 44 (A2) は同じ文様を平行沈線で表現し、43 (A4) は押引文と櫛描波状文を併用する。45 (B5) 46 (B5) は上に横位沈線帯・下に櫛描波状文を配置するが、これは 40.41 の文様を原体置換によって描いている。39 (C9) はハイガイの縁辺を深淺に押引く断続文を二列配置する。73 (D3) は紅村の実測した無文土器で、層位から天神山式に属する。

紅村が注目して採拓し、断面図を残した 76 (H3) は、波頂部に円盤をかしめる技法が天神山式特有の波状文と併用されている。以上の例示資料は石山式から天神山式への密接不離な転化を物語る。天神山式は本来 B 5 層、C 5 層、D 4～6 層に集中し、石山式土器との前後関係が層序で分離されている。(72・75・76 は縮尺 1/2 で表示している)

天神山式土器の製作法の特徴は、内面壁に指痕を多く残すことである (42・47・50・52)。また肉眼観察では限界はあるが、繊維を全く含まないと推測できる資料も多く、50 の内面観察では、明らかに長石・石英を微粉碎しており、素地つくり改良を加えているように見える。知多半島の天神山式土器は含繊維土器伝統から、無繊維素地での制作技法への転換期であったと推定できる。50 の平均器厚は 5 mm で、石山式の 28 に比べ 1 mm だが薄くなっている。74 (C8) はおそらくこの時期の底部片で、口縁部から積み上げてきた粘土板円筒の底面部にくぼめた円盤を押し当て塞いでいる。

天神山式土器の名祖である本遺跡の在り方と、他遺跡の組成を比較してみよう。図 7 上段は北に隣接する塩屋遺跡の中層で、石山式と混在していた天神山式土器である。報告 (磯部 1984) では約百片を図示しており、ここでは (図 8-1～21) を示した。4 は磯部報告では中層 B 式に類別されている。押引波状文 (1～3) と凹線文 (4・5) 沈線波状文 (6～10) および主体となる櫛描文土器 (11～20) からなる。

塩屋遺跡では文様全体が判明する大破片が少ない。ただ (7・11・12) は口端直下に沈線列を置き、その下に横位波状文を組み合わせる配置は (図 5-45・46) と同様、前型式以来のモチーフの伝統である。(13・14) は横位波状文を上下二段に重ねている。(15～19) は一列以上である以外はわからない。斜行施文 (20・21) は原体置換例 (10) を含むが少ない。

瀬戸市長谷口遺跡 (永井ほか 2004) は三河山地の河岸段丘面に立地するが、早期末の入海 II 式・石山式・天神山式土器が多くあり、天神山式は 56 片が図示されている (図 8 下段)。立地環境からハイガイ原体の施文は少なく数片で、ヘラ・棒・半截管状具等により描く例が多いのが特徴である。文様自体は横位波状文が主体であるが、(図 8-42) は上から刺突列・横位ヘラ線・横位波状文を描く。(図 5-41) と共に刺突列の伝統を残存する。

## 2-8. 「塩屋中層 B 式土器」存立の是非

一部の研究者は石山式と天神山式の間、別型式が存在すると主張している。磯部幸男は塩屋遺跡の「発掘調査では遺物包含層の層序によってこれを (中層土器の A～C の三別…増子補記) 分けることはできなかった」(磯部 1984 : 7 頁)。しかし「上層土器と伴出する中層土器が B 類と C 類に限られ、A 類は上層土器に伴わなかったことも考えあわせ、編年上の位置を爪形文列を主とする石山式と (A 類の文様構成のモチーフを継承しながら、押し引き文とする B 類を) 天神山式との間におき、塩屋中層 B 式土器と仮称することにしたい。」(同前) と論じた。これが塩屋中層 B 式土器名称の初出である。

山下勝年は磯部説に従いつつ、東海西部を分布の中核とする早期末土器型式に、関西の石山式の名称は適切ではないので塩屋中層 A 式と改名し、次いで塩屋中層 B 式、天神山式は塩屋中層 C 式と改称すべきと主張した (山下 1989)。

結論から言えば、磯部が塩屋中層 B 式と仮設した組成は、石山式・天神山式と分離独立して、あるいは遺構一括単純資料としても、今に至るまで確認されていない。紅村は天神山遺跡の層位的事実に基づき、爪形刺突列と押し引き文化した刺突列が、当初から石山式に共存していること、さらにこの両手法が天神山式の層準にお

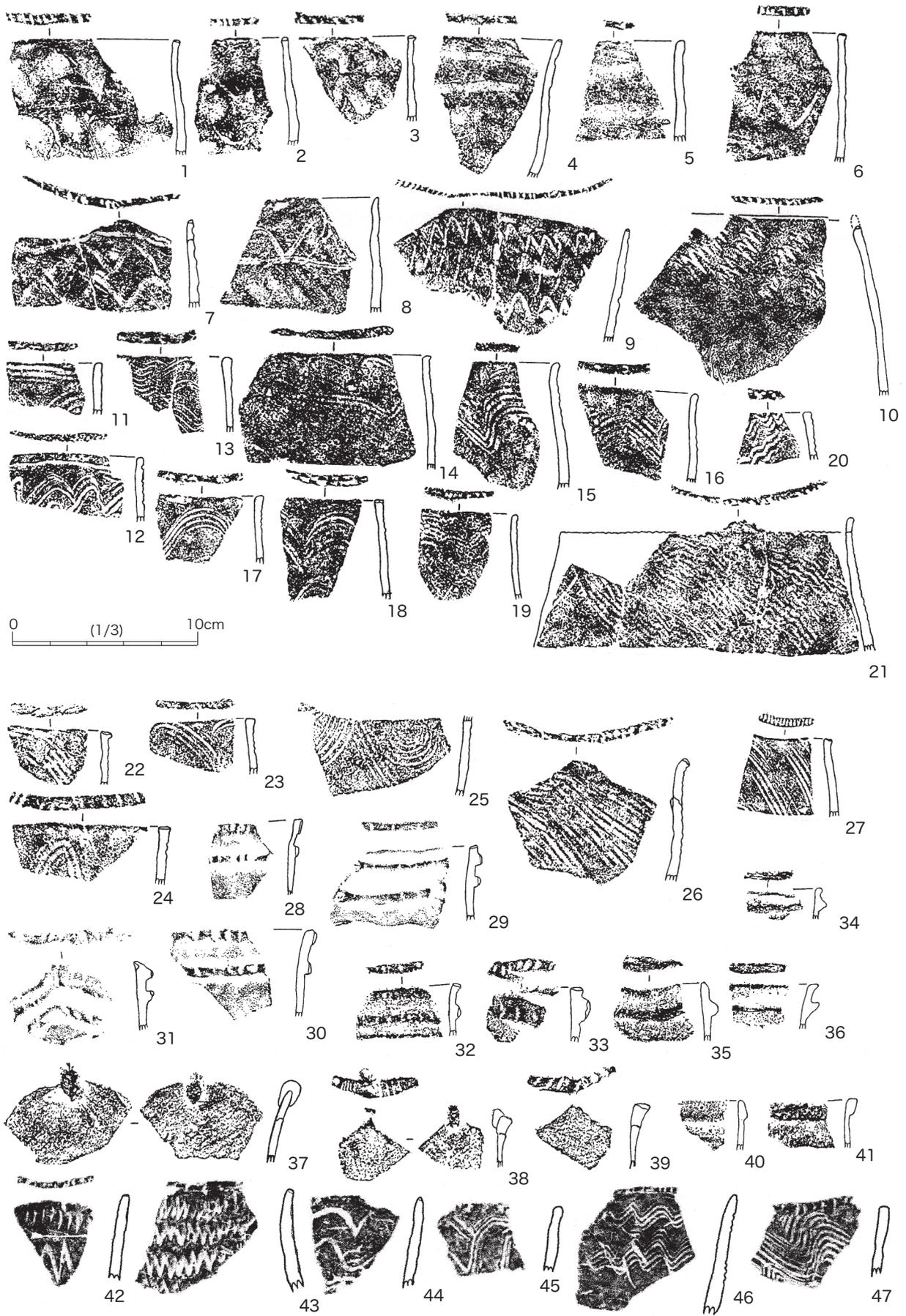


図8 塩屋遺跡の土器 (1～41) (山下 2006)、長谷口遺跡の天神山式土器 (42～47) (永井ほか 2004)

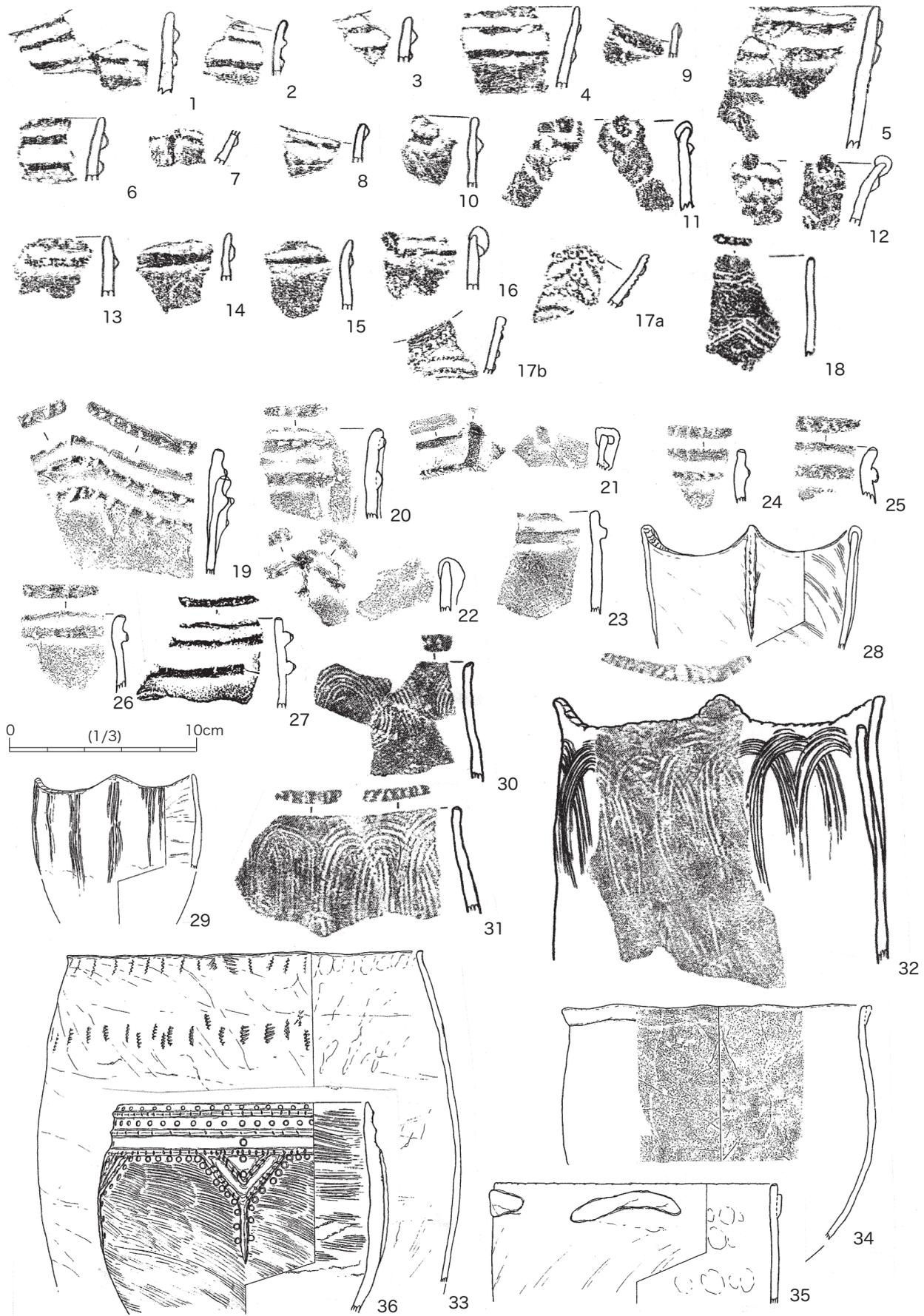


図9 蘇原東山遺跡の土器 (1~18) 1/3: 楠廻間貝塚の楠廻間式土器 (19~36)  
 (各務原市埋蔵文化財センター 1999、坂野ほか 2005)

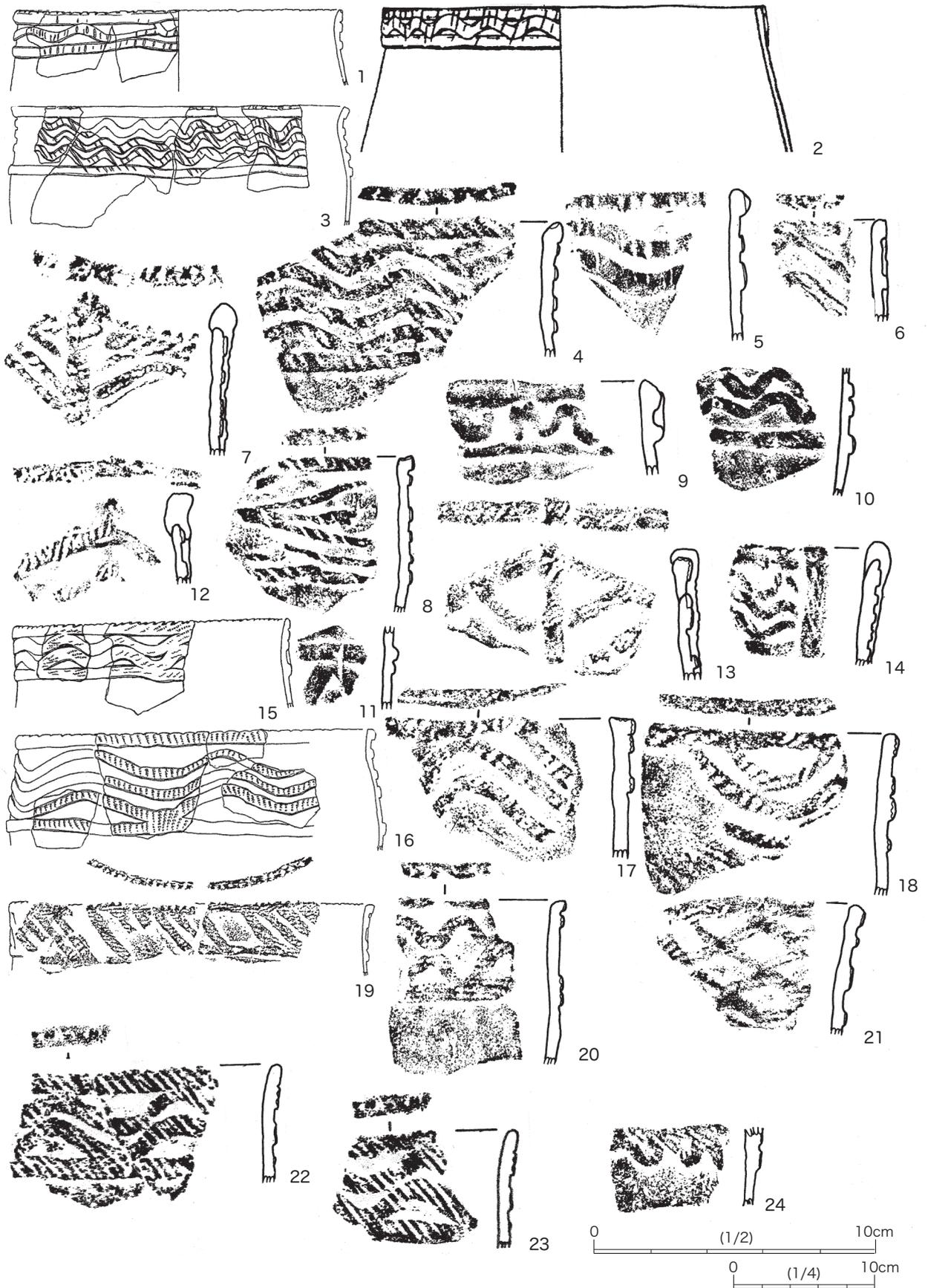


図10 塩屋古式土器 (1~21) 塩屋中式土器 I (22~24) 2 以外は塩屋遺跡  
(1~3・15・16・19 1/4. 他は 1/2) (磯部 1984, 山下 2006)

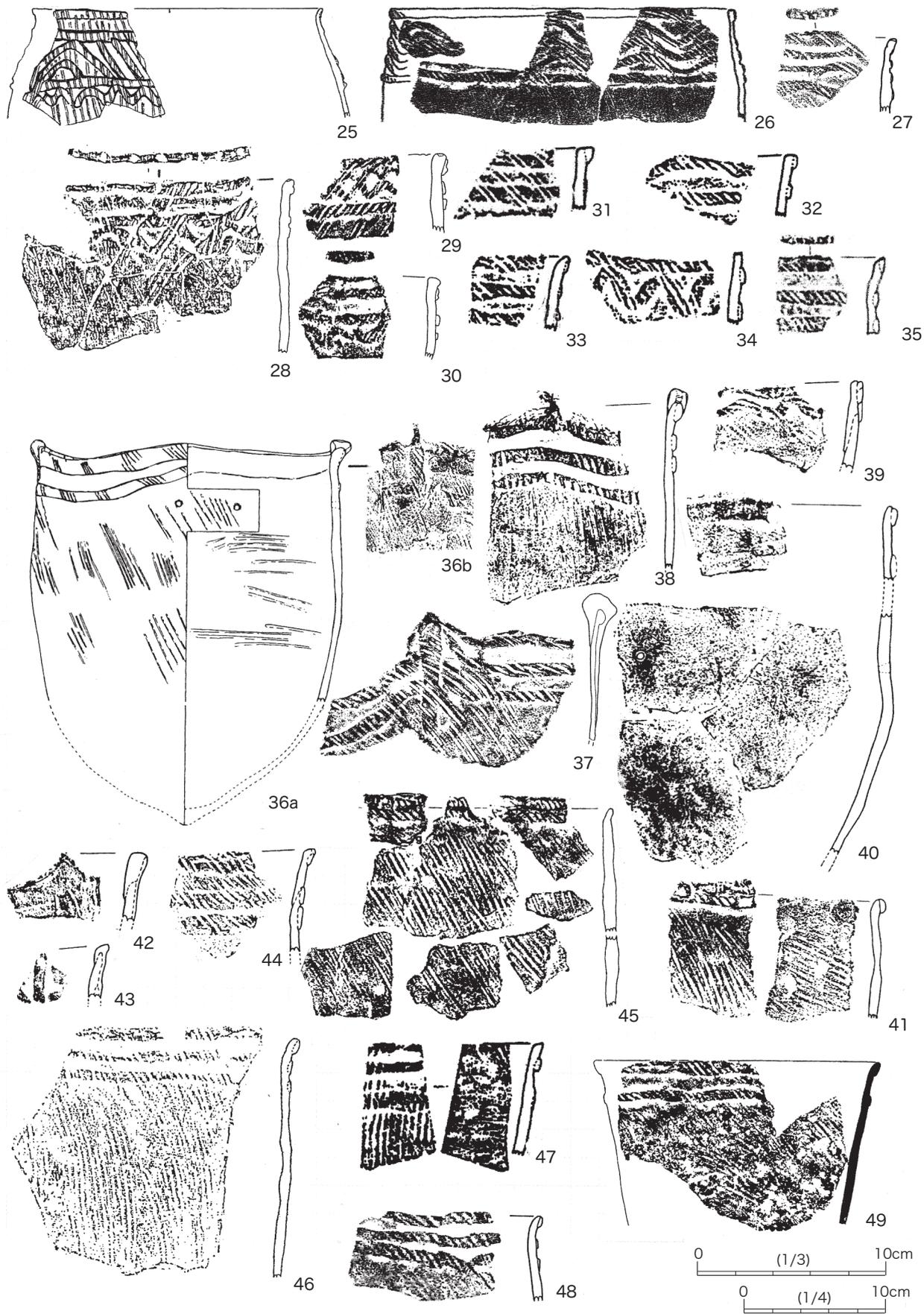


図11 塩屋中式土器Ⅱ (25～35) 塩屋新式土器 (36～49) 25・26・36・49以外は1/3  
 (25子種、26.27 楠廻間貝塚、28 港町、29.30 北貝戸、31～34.47 小の原、  
 35 山手宮前 36.38～45 市場、37 大曲輪、46 旧紫川、48 今朝平、49 羽豆岬)

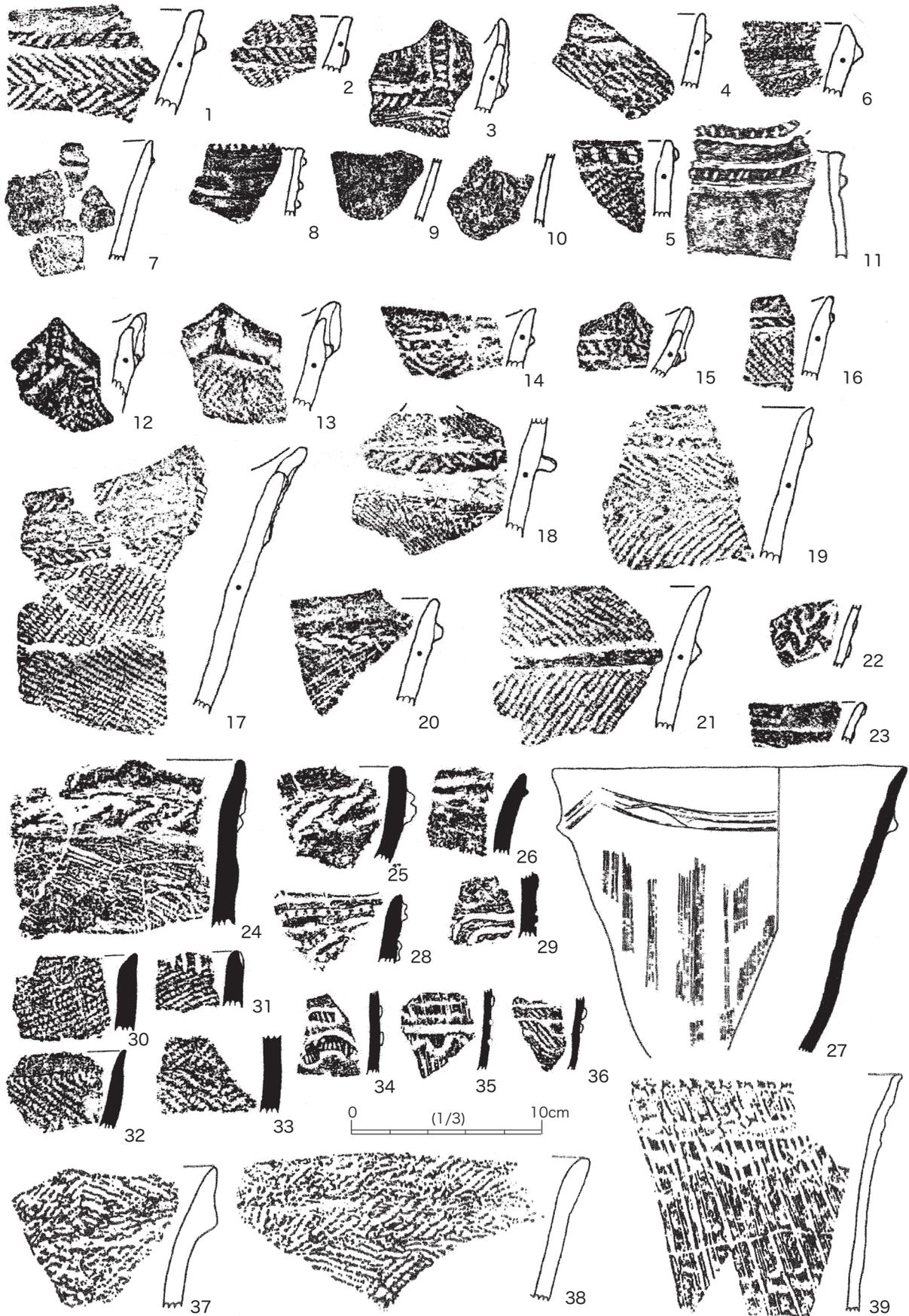


図12 長野県の早期末～前期初頭土器の推移 (1～10 買地3号住, 11 芥沢, 12～23 買地6号住, 24～36 芥沢昭和26年発掘住, 37～39 駒形1号住)

いても、残存要素となって少数が共伴することを1963年にすでに明示していた。今回のB区とD区の層位状況も紅村の指摘とおり、石山式から天神山式への変化の過程に、塩屋中層B式土器の介在は全く不要であること、塩屋中層B式の設定が誤りであることを明示している。

## 2-9. 天神山遺跡の終末期土器群 (図6)

天神山式直後として設定された楠廻間式土器が存在する。図6-56は試掘I・II層出土、57は県史P.247の15の転載である。58は『東海の先史遺跡』掲載資料で、胴部に3条単位ヘラ線で連続三角文を描く。ヘラ刻目ある二条の断面三角形の細い突帯の特徴は楠廻間式土器と推定した。75(E4)は口端に横位の突帯をめぐらし、波頂部の内面側から外面口縁に垂下する突帯を追加しており、この特徴は楠廻間式の突帯文土器の典型である。なお楠廻間式に続く塩屋式土器(59・60・70)が同じE区の3層から出土しており、両型式間の時系列での層位的变化が確認されている。

塩屋式土器は図6-59～70が相当する。64～68は『県史資料編考古I』の250頁からの転載で、出土位置・層位は不明である。E区3層に塩屋A類(59・60・70)が存在する。(62～64)は塩屋B類に相当し出土位置は不明だが、後述する塩屋古式～中式に相当する。

天神山遺跡の最終末期を示すのは、紅村土器資料(図6-71注記なし)である。特に注意して観察したが、同じ木箱に他の土器と共に保管されており、灰褐色の器面の色調と素地の特徴は他の土器と違和感はなく、木箱には別遺跡の土器等の混入はなかった。保存状況も発掘直後の洗浄を経て保管された、他の土器片と変わりはないと観察したので、本遺跡資料と推測した。

外反する深鉢の口端に接して細く低い紐状の突帯一条と、その下に波状に貼付される。最後に櫛歯状の細い条線を器面全体に縦位に施す。口端面にはヘラの刻目がある。この特徴は後述する塩屋新式土器である。

71の存在は天神山遺跡が前期初頭まで継続したことを示す。隣接する塩屋遺跡より一型式

遅くまでの土器があり、南知多の縄文早期後半遺跡群では最初に出現し、また最後まで存続したのが天神山遺跡であった可能性は高い。

## 2-10. 天神山式と楠廻間式土器との関係

新発見の知多市楠廻間貝塚の採集土器から、塩屋中層C式(天神山式)と「天神山式楠廻間段階」土器の細別が提唱された。天神山式楠廻間段階は、天神山式の主体となる櫛描文系18個体、無文土器18個体、突帯一条の隆帯文土器12個体、その他1個体からなるとされた。細別の根拠は天神山式の主体となる櫛描文系が依然主体となるが、神之木台の影響を受けて、新出現した突帯一条の隆帯文土器の新規の共伴を挙げている(山下2003)。

同貝塚の緊急発掘調査が実施され、その報告で楠廻間式土器が設定された(図9-19～36)。この組成は口縁部に細い貼付突帯を少条(1ないし2条)めぐらす薄手の深鉢(19～27)が約40個体あり主体となる。次いで無文土器28個体。縦方向に花卉状に描く櫛描波状文土器(29～32)は3ないし4個体ある\*。他の有文土器数個体、これに関西の一乗寺南下層式類似土器(36)を伴うと報告された(坂野ほか2005)。

「天神山式楠廻間段階」と「楠廻間式」の違いとして次の点がある。

①. 楠廻間式の主体となる突帯文土器は、組成の50%を超える主体であって、山下の指摘した櫛描文土器に随伴する少数派ではない。一条以上の複数条の突帯土器(19～21.27)7個体以上を含み、一条に限定する山下の指摘はあたらない。

②. 楠廻間貝塚の櫛描文系土器の内、主な施文原体としてハイガイなどの肋条ある二枚貝背面を用い、横位に展開する櫛描文系(図5-42～52に相当)35個体は天神山式である、と坂野は指摘している。事実、南知多の新津・向畑の二つの遺跡は天神山式の段階まで継続し、瀬戸市の長谷口遺跡も同じで、すべて横位に展開する櫛描文土器が主体となる。三遺跡ともに楠廻間式土器まで継続しておらず、天神山式段階で廃絶している。この事実から、横位展開の櫛

\* 報告に個体数の記載はなく、2021年7月直接坂野から教示を得た。

描文土器は天神山式の主体となる固有の系譜であり、山下の主張するように「天神山式楠廻間段階」に残る、という確実な証拠は確認されていない。

③. 突帯文土器を主体とする楠廻間式にのみ伴う、縦位花卉状の櫛描文系（図 9-30～32）は、楠廻間式の組成に占める割合は 5% 未満である。突帯文土器と無文土器の二者で約 9 割を占める楠廻間式土器は、新たに出現した型式系統だが、天神山式に完成した土器製作技術を引き継ぎ、無繊維・薄手という属性は東海西部地域の特徴である。

以上の事実関係から判明した楠廻間式土器の他遺跡での在り方を検証する。

（図 8-1～41）は隣接する塩屋遺跡の天神山式であるが、坂野説に即して（25～27）の縦位花卉状となる可能性ある櫛描文系を楠廻間式と仮定すると、突帯文系の（28～36）とは 3:9 の比率で、後者が明らかに多く楠廻間式の構成に共通する。

天神山遺跡の（図 6-56～58）の突帯文土器に対応する、櫛描文系の有無を検討する。（図 5-53）は中央から右下が、施文後のナデによって文様が消されているが、縦位の弧線文を配したと推測される。D 区 4～6 層接合の（50）より上位の同 3 層の出土である。（54）は E 区 2 層出土。B 区 2～5 層は天神山式が主体で、B 区 1 層出土の（55）はより新しい。

以上の 3 片は縦位展開の楠廻間式の櫛描文系と類似すること、また本来の天神山式層より上層から出土した共通点を持つ。突帯文系とともに各 3 片のみで量の乏しさは否めないが、天神山遺跡にも楠廻間式土器が存在したことは確かである。

（53～55）の 3 片の施文原体は（47～50）のハイガイではなく、細く密な櫛状である。塩屋の（図 8-23・25・27）も細く密な櫛状で、図 8 上のハイガイによる（15～21）の天神山式固有の櫛描文とは相違する。楠廻間貝塚では楠廻間式にハイガイ原体もあるが、報告書の 388・394・396 等は天神山・塩屋と同じハイガイ以外の不揃いな原体である。

（図 9-1～18）は木曾川下流の各務原市蘇原東山遺跡の土器で、（18）の櫛描文系は横位

展開の天神山式である。主体は突帯文系の楠廻間式土器である。（17 a、17 b）の円形刺突は一乗寺南下層式に酷似し楠廻間式に伴うと推測される。

関東甲信地域の早期末に突帯文土器が一斉に出現するが、それは先行する各地の土器の属性に、突帯を付加するかたちで形成される。楠廻間式土器の薄手の突帯文土器は、関東の神之木台式の影響で出現したと理解されていたが、埼玉・打越遺跡や山梨・釈迦堂遺跡で、神之木台式に共伴するのは天神山式である例が指摘されていた（神奈川考古同人会 1983）。神之木台式の影響を受け天神山式から楠廻間式土器に移行するが、その交代は神之木台式の存続期間途中に生じた可能性が強いと推測される。

天神山式のハイガイ原体の櫛描文から、楠廻間式の別な原体の櫛描文になぜ置換したのか？を検討する必要がある。想像ではあるが、アカホヤ火山灰の降下によって、海底に潜り込むアサリやハマグリなどと異なり、海底面上で生活するハイガイは火山灰の混ざる海水に直接晒されるため、浅い海岸付近では生息が長期間途絶えた可能性がある。

伊勢湾岸の楠廻間貝塚を除き、三河湾沿岸を含む入江では楠廻間式～塩屋式土器の貝塚形成が絶無となる状況は、通常的气候変動からは考え難く、格別な現象が生じた結果と推定し、アカホヤ降下を仮説とした次第である。それは天神山式から楠廻間式土器への、型式変化の契機にもなったとも推測している。

楠廻間式土器の遺跡は特別に少ないが、上記以外に浜名湖に臨む有力な寺川・天白遺跡がある。天竜川を遡る長野県へ拡大し、上伊那郡飯島町カゴ田遺跡では、花卉状櫛描文土器を伴うと推測できる突帯文土器が確実にある（神奈川考古同人会 1983、長野県図版 3 参照）。木曾川経由も木曾・板敷野遺跡を経て、塩尻市にも無繊維突帯文の楠廻間式土器が持ち込まれている状況が判明している。

## 2-11. 塩屋式への移行とその推移

塩屋式土器の生成は、楠廻間式の突帯文土器を祖型とすると考えている。この系譜の推移を追うため塩屋遺跡の土器を（図 10）に示した（2のみ神之木台式遺跡）。

塩屋遺跡の土器を再検討した山下勝年は、本遺跡に楠廻間式土器は存在しないと断定し、その前提で塩屋式を4型式に細別した(山下2006)。この仮説に対しては、塩屋遺跡と楠廻間貝塚の土器を並べて図示し、塩屋に楠廻間式土器の実在を検証した(増子2006)。

発掘者の磯部によって塩屋上層のA類土器が下に、B類が上から検出されたという1984年の記述がある。公開された上層土器群には数型式の混在が判明した。A類とされたいくつかは楠廻間式であり、その一部がB類の下層にあるというのは当然である。要は上層土器群の厳密な型式分離が不可欠である。塩屋A式とB式編年試案(増子2006)を取り下げる。図8-30他の楠廻間式を塩屋A式に含めた誤りがあるためである。

塩屋式土器は古・中・新の三型式の変遷が適切と思われる。

塩屋古式土器(図10-1～21)：塩屋上層土器群から、石山式・天神山式・楠廻間式・塩屋中式土器を除いた一群である。指標となる特徴は基本的に丸底深鉢で、器壁は楠廻間式より薄く器面調整は平滑である。口縁に3条以上の細い突帯で構成される装飾をつける。上下2条の横位区画突帯間に波状文を1条(1・2・9) 2条(15) 3条(3・16・17) 4条(4) 表現する一群が主体である。

量は少ないが波状口縁の場合、波頂から垂下する突帯を加えるが(7・12・13)、平縁でも縦位の区画帯の(14)もある。モチーフが不明の多条貼付(8)、重弧文(18) 上下対弧文(20) 格子目文(21) 単斜列(19) などの多様な文様を描くのがこの時期の特徴である。

突帯上に付加する文様原体で分類する。

1類：楠廻間式以来の伝統のヘラ刻目(1～8)を突帯に加える。

2類：海産の小巻貝である、ヘナタリカウミナノ殻を突帯上に押捺する(13～21)。

3類：素文の突帯(9～11)が数個体存在する。

4類：無文土器も存在するが量は少ない。

以上4類からなる塩屋古式土器は、分布圏が拡大し東海全域と伊那谷地域・滋賀県・福井県・石川県・神奈川県に及ぶ。編年的位置については後述で検討する。

塩屋中式土器(図10-22～24、図11-25～35) 口縁に接する突帯は低く目立たない。平口縁が多いが波状口縁もある(32)。突帯貼付は口縁部に集中することは古式と変わらないが、(25)のような古式に多い複雑な文様は少なくなる。上下区画帯内波状突帯貼付(26・29・34)が継続し定型化する一方で、波状突帯が文様帯下端に移行する(24・25・28)は中式の指標となる特徴である。2ないし4条の横位平行のみ(31・33・35)は古式にはなく、中式で新たに出現する。

突帯上から胴部に付加される条線帯の原体は、沿岸地域では途絶えていたハイガイ利用が復活して、肋条ある二枚貝背面を多く用いるようになる(22～27・29・32～35)。内陸では櫛状具(28・35) 半截竹管状(31)も原体に用いる。付加する条線帯は右傾が多く、左傾(28～30)は内陸部遺跡に多い傾向がある。

塩屋遺跡には(図10-22～24)の塩屋中式土器がわずかに残る。これはハイガイの条線帯(22・23)の利用と、文様帯下端波状突帯の(24)の特徴から古式と分離した。

引き続き長野県南部から静岡県東部まで土着化し、関西から日本海岸まで最大の広域分布を示す。そのため文様表現は各地で地域的多様性が生じている。

塩屋新式土器(図11-36～49) 口縁部の波状突帯貼付は痕跡的となるが、横と波状各1帯の(39)は省略の極限となる表現と思われる。横位突帯は1条(41)が楠廻間式以来復活するが、これも省略の結果であろう。2～3条が多い一方で無突帯(45)もある。波状口縁深鉢は37の低い波状と42の鋭く尖る例がある。名古屋市大曲輪の37に酷似する例は楠廻間貝塚にある(報告117P-594)。36は低い四波頂で一對にのみ、2条の横位突帯上に短い縦の貼付を付ける。38は口端の突帯に縦瘤を貼り付ける。

口縁部の条線帯はハイガイが多い。内陸の市場遺跡では半截竹管(45) 原体不明(41)とともに、条線帯の省略(40)も現れる。

塩屋新式土器は関市市場遺跡を除いて、ある程度以上のまとまりのある一括資料はないが、図示した岐阜・愛知県下の遺跡で少数が認めら

れる。他地域では長野県下伊那の倉平、上伊那では舟山、諏訪の十二の後に確実な塩屋新式が認められる。静岡では木島遺跡三次調査と、四次調査集石内に存在し、この遺跡の東海西部地域との強いつながりを暗示している（引用は神奈川考古同人会編 1983 による）。西方への波及は滋賀県安土遺跡M地点 246 と、N地点 155 の波状口縁例は塩屋新式土器に比定される（泉編 2005）。

## 2-12. 塩屋式土器の編年位置決定の試論

東海西部地域では塩屋式段階に他地域型式土器の搬入がほとんどなく、直接の型式対比は困難である。一方塩屋式土器は長野県南部域に比較的安定的に搬出される傾向のあることは知られていたが、東海西部地域の側からその実態を分析したことはこれまでない。長野南部では神之木台式や下吉井式土器が、山梨・静岡経由で東海系以上に持ち込まれ、在地型式との関係もかなり判明している。早期末・前期初頭の竪穴住居址が数多く調査され、複数の共伴関係の比較検証が可能という利点がある。

長野の早期末は絡条体圧痕系土器群で、突帯は前期初頭の塚田式から縄文と併用されると認識されていた。しかし中沢道彦は塚田遺跡の報告総括「塚田遺跡出土早期土器群について」で、逆T字形突帯に着目して、塚田式に先行する要素であり早期末まで遡ると予察した（中沢 1994）。これを受けた守矢昌文の分析（守矢ほか 2000）によって、茅野市周辺の早期末の知見が追加された。

### (1). 神之木台式土器の共伴

守矢は茅野市買地遺跡 3 号住の、器面に縄文施文の盛行する 1 群 1、2 類土器の逆 T 字形を含む突帯の一部に、絡条体（図 12-1.2）縄原体（同 5）棒状工具の押圧（同 3）ある突帯土器を含むこと。共伴するのは関東の神之木台式（同 7）と、東海系の薄手の土器（同 8～10）であると指摘した。東海系の土器は指頭押圧痕ある器面と観察されており、楠廻間式土器と推定される。同市内の芥沢遺跡には楠廻間式の明確な例がある（同 11）。

茅野市内での神之木台式土器の様相は、芥沢遺跡で切り合う 31 号住（古）に天神山式比定土器と共伴する。34 号（新）には楠廻間式と

類似する土器を含むが、在地化した突帯土器がなく、買地 3 号住との比較はできない（百瀬 2007）。ただ神之木台式土器は、天神山式（31 号住古）と楠廻間式？（34 号新）双方に伴う事例は貴重な成果である。

重要な情報は東海系とされた薄手土器である。木島遺跡を含む富士川流域は神之木台式の分布圏で、木島遺跡に楠廻間式土器は存在しない。天神山式と楠廻間式土器の主分布域は伊勢湾沿岸であり、その伊那・諏訪への搬出は天竜川・木曾川水系を經由する東海西部地域が発出地に限定される。

中沢の予測した、塚田式に先行する逆 T 字形突帯の出現と、突帯上に絡条体・縄・棒の各圧痕を付ける二つの要素を備えた組成を、守矢は買地 3 号住でセットとして確認し、早期終末に位置付けた（図 12-1 段目）。これは遺構一括資料による矛盾のない、正確な情報に基づく指摘である。

### (2). 塩屋古式土器の共伴

第 II 段階の図 12 の 2 段目は、買地 3 号住に重複する 6 号住の土器である。守矢は 3 号との混在を予測して、形式的な分類を併用して整理する。在地の突帯縄文土器の突帯刻目はヘラが多用され（12～17）、タガ状（18）を含む。この主体となる土器群と、図示しないが縄文のみの土器も多い。撚糸文も使用している。6 号では 3 号になかった下吉井式（20）が存在するので、前期初頭の塚田式土器に比定されている。

6 号で重要なのは、東海系の小巻貝圧痕のある塩屋古式 2 類（22）と、素文突帯の同 3 類（23）が存在することである。これらは 3 号にはなかったもので、新たに 6 号の塚田式に加わった要素と認定される。これまで塩屋古式 2 類土器＝塩屋 B 類＝木島 II 式土器は、澁谷によって早期末に位置付けられていた。しかし上記の買地 6 号住の在り方は、塩屋古式 2 類土器が前期初頭である塚田式に組成することを明示する。

前述の芥沢遺跡 31 号と 34 号での神之木台式土器に伴う東海系が、天神山式と楠廻間式にまたがることは、買地 6 号の在り方に矛盾のないことを、間接的ながら証明している。

### (3). 塩屋中式土器の共伴

図12の3段目は諏訪考古学研究所による、芥沢遺跡昭和26年発掘住居址資料で、下吉井式土器に共通する突帯(24～27)押引文と沈線(28.29)縄文土器(30～33)と塩屋式(35.36)からなる。本遺跡の2007年報告では30軒を超える住居址が記録されているが、本遺跡の突帯土器は器面に縄文施文のない例が多く、突帯上に雑な刻目を付ける特徴が目立つ。駒形遺跡も同様な例が多く、従来これらは在地化した下吉井式土器と呼ばれていた(樋口ほか2004)。

北信の塚田式と並行する、南部に分布する坂平式土器と定義された(澁谷2006)が、茅野市内の買地6号住は、突帯と縄文を特徴とする塚田式が主体である。同市内の芥沢遺跡は器面の縄文がない坂平式が主体で、同時期ではあり得ない。

共伴する東海系土器から分析すると、時系列で前後関係にあることを示している。買地6号住の塚田式土器には塩屋古式が伴うことは前記した。一方、坂平式に共伴する東海系土器は、ハイガイを含む原体の条線帯を、口縁部の突帯から上胴部器面まで施す塩屋中式土器である(35.36)。特に35は波状細隆線が口縁部文様帯下へ移動した典型である。

澁谷論文の第5図1～7は坂平61号住土器であるが、突帯上と器面に縄文を施文する(5)を塚田式とするが、報告では花積下層式に比定されている(報告P.306)。共伴する東海系土器は、上ノ山Z式ないし直後で塩屋式より新しい。坂平式と塚田式との共伴を、立証する根拠になる資料ではあり得ない。

#### (4) 塩屋新式土器の共伴

図12の4段目は宮坂英式昭和36年発掘の駒形1号住の資料で、(37.38)は肥厚口縁の深鉢。その特徴は中道式の指標とされている。共伴する(39)は明らかに塩屋新式土器である。

東海西部地域の早期末～前期初頭の型式を、関東編年と直接対比するのは難しいと考え検討を怠ってきたが、長野県の研究成果を積極的に援用すべきと判断した。その結果は上記のとおりである。天神山式と楠廻間式土器が神之木台式土器並行であることは、精度の高い買地遺跡3号と6住・芥沢遺跡31号と34号の切り合の報告に矛盾はない。

塩屋古式は買地6号住で、塚田式と下吉井式に共伴し、同時期である確率が高い。一方で(在地の下吉井式)と坂平式土器が塚田式の後続型式であることは、芥沢昭和26年発掘資料に塩屋中式が共伴することから、その蓋然性は高いと思われる。塩屋新式はそれに続く中道式土器に伴う。両地域の編年の相互検証までが展望に入ってきたと思われる。東海は長野県の研究成果を、謙虚に学ぶ必要があると思う。

#### 2-13. 結語

東海西部地域の縄文早期後半の研究は、吉田富男を中心に粕畑式・上ノ山式・入海A、B式の設定に始まる(吉田1954)。石山貝塚での石山式の設定を受けて、紅村は本遺跡の層位から石山式と天神山式の細別を確定した。増子は八ツ崎I式、入海0式を追加したが、優れた遺跡の層位的資料の情報も、編年的な整備を伴うことがないと読み解けないことがある。天神山遺跡の粕畑式以前土器はその典型例であった。

しかし、事実関係を正確な記録に残された紅村資料によって、我々は本遺跡が知多半島南端遺跡群の中で、異例の茅山下層式・八ツ崎I式・粕畑式に始まることを、層位との関係で論ずることのできる稀な機会を与えられた。

最後に、資料の扱いと研究に関して全面的に委任を頂戴した、紅村京子様には厚くお礼を申し上げます。(増子康眞)

### 3. 天神山遺跡の土層断面図について

図2の土層断面図は天神山遺跡調査時の数少ない記録として、とても重要な情報を与えているものであることは間違いない。しかし、やや詳細に見ると、難しい図面であることが理解できる。端的に言うと、土層断面記録のセクションポイントがよく分からないのである。土層断面は、A～D区の壁記録から、90度クランクしてE・F区の壁記録へと続くようであるが、D区からE区へのクランク部分がどのように接続するかの特定が難しい。特にこの点に関して検証し、当時の調査の状況を復元してみたい。

図13は土層断面図の元図と検討結果を示したものである。右上は元図(図2と同一)、左上はセクションポイント位置想定図である。想

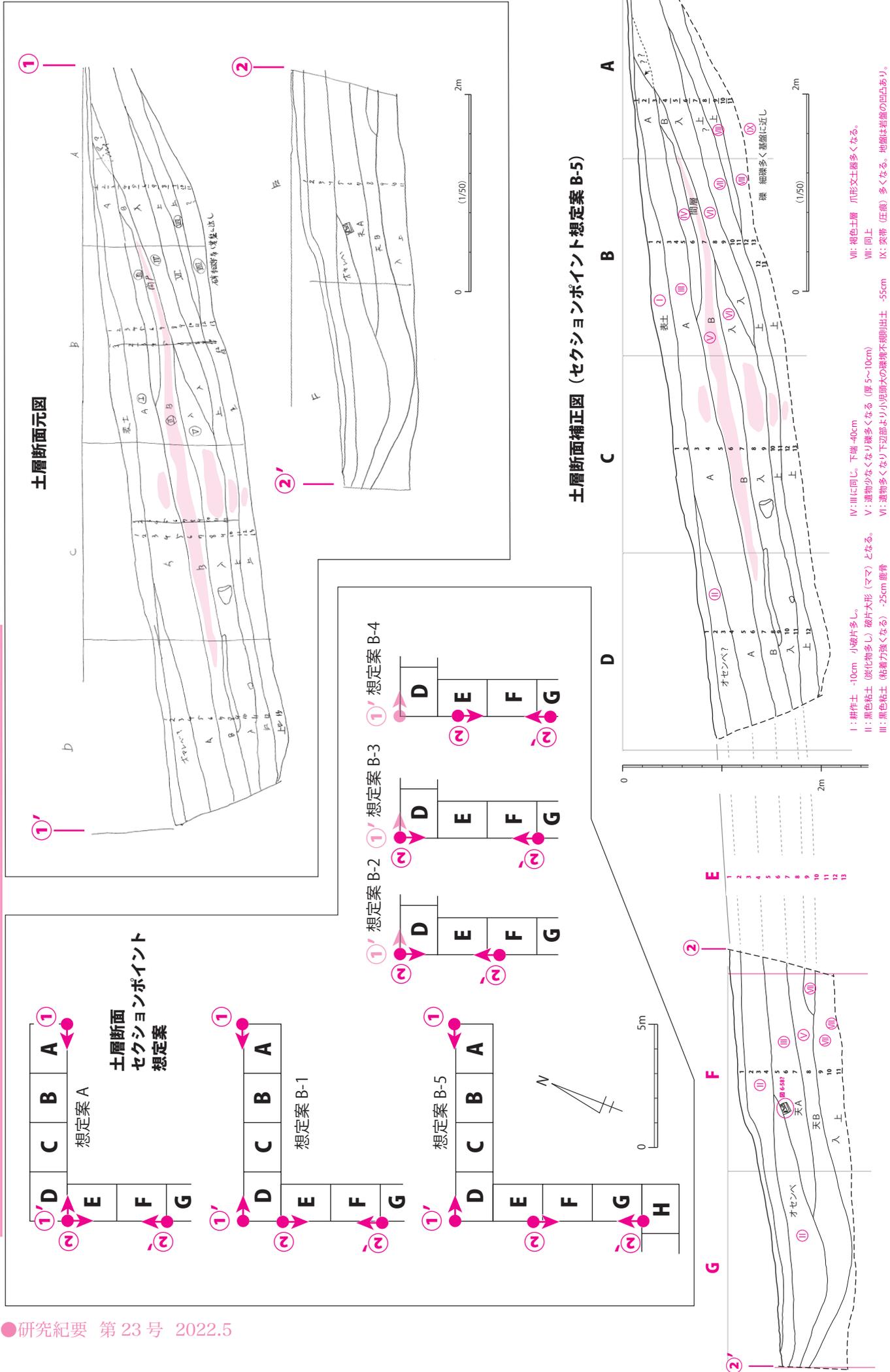


図 13 天神山遺跡 土層断面補正図



写真7 調査風景写真（磯部幸男氏撮影）



写真8 調査風景写真（岩野見司氏撮影）

定案は、A区～D区の南壁ラインの記録を残したとする想定案Aと、同北壁ラインの記録を残したとする想定案Bとに大きく分けられ、想定案BはE～F区のセクションポイントの位置によって、B-1～B-5案までを提示した。これは、『愛知県史 資料編』で知られている写真で見た場合（写真8）、これだけの場合が考えられるというもので、A区～D区の土層断面セクションポイント（①-①'）と、E区～F区の土層断面セクションポイント（②-②'）との位置関係に基づくものである。このように複数通りの想定案が考えられたのは、元図（図2）でみたところのE区～F区セクションの右端が、区下方に従って手前側に傾斜をなしており、掘削箇所の端部である形状を呈していることによる。A案の場合は、A区～D区の土層断面はトレーシングペーパーに写し取られる際に左右反転したものと考えられるが、現在は現地で作図した測量図面のもとながないため、その可能性の是非は不明と言わざるを得ない。また、B案にした場合について、5通りを想定した。B-1案は土層断面元図にあるE区・F区の記載を尊重した場合である。この場合D区南東端が掘削端部となるには、少なくともD区の一部が未掘削であった場面があったことになる。B-2・B-3案は、掘削箇所の端部からの測量を重視して、実際にはD区南西端からの測量であったことを想定したものである。E区・F区の4mの測量であったとする記録との整合は保てないようである。B-3案はE区・F区の記録を実施したことを尊重したもので縮尺と変倍する形で図化してしまったとするものである

が、果たして実際にそのようなことが起こるのであろうか。

このことを考える上で、重大な示唆を与える情報を、磯部幸男氏の一連の調査写真に見つけることができた（写真3・7）。写真7は北東端よりA区からD区側に撮影した調査風景である。これまで知られていた調査写真では、クランク状に貫通して掘削調査している様子しか知られていなかったが、写真7を見ると区の上から人が立って見れるほどに土橋状に掘削が残されていたことが分かる（写真7白の矢印部分）。この部分は、写真8では白印部分に当たるようで、A～D区の掘削に当たっている生徒らの状況から、写真7の状態から写真8の状態に、掘削調査が進行したことが分かる。それを勘案したセクションポイント案が、B-4・B-5案である。特に、写真7見ると土橋の幅は1区分あるように見受けられる。従って、最も可能性の高いのはB-5案と考えた次第である。

セクションポイント位置がB-5案であるとして、セクションを補正したものが、図13の下図である\*。元図に区分けの線が入れているものの、これが実はF区とG区の境に相当するようである。北端の掘削はE区内から始まっていたようで、掘削の下場がF区端の位置に当たるようである。このことから、②-②の土層断面の主体はF区～G区であったと考えられ、土層断面記録終了後にE区の掘削が本格的に開始された可能性が高い。

また、土層断面元図には、紅村氏によって試掘調査時の土層との対比が試みられていた。紅村氏の残された検討と澄田メモにある土層断面

\* 赤線・赤字部分が筆者（川添）の加筆・検討部分である。

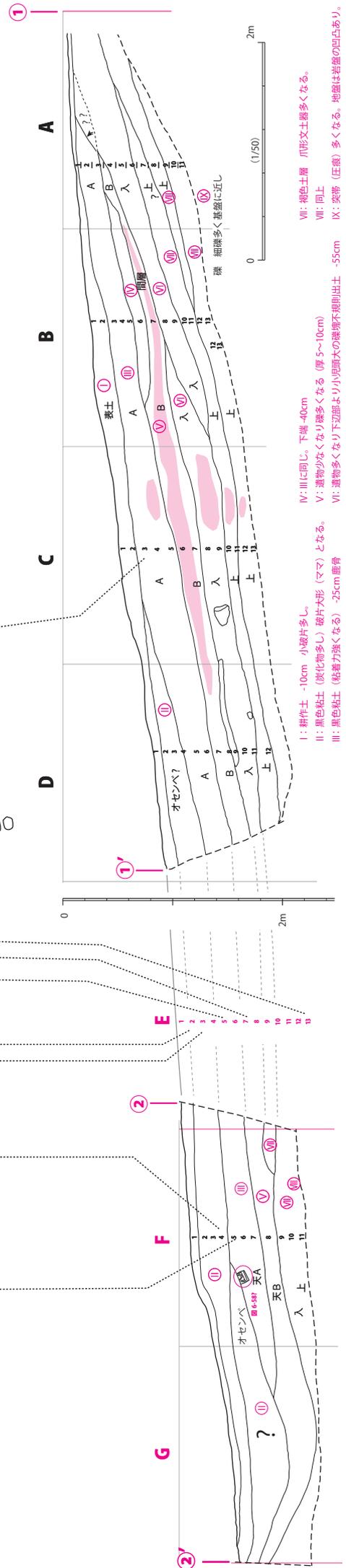
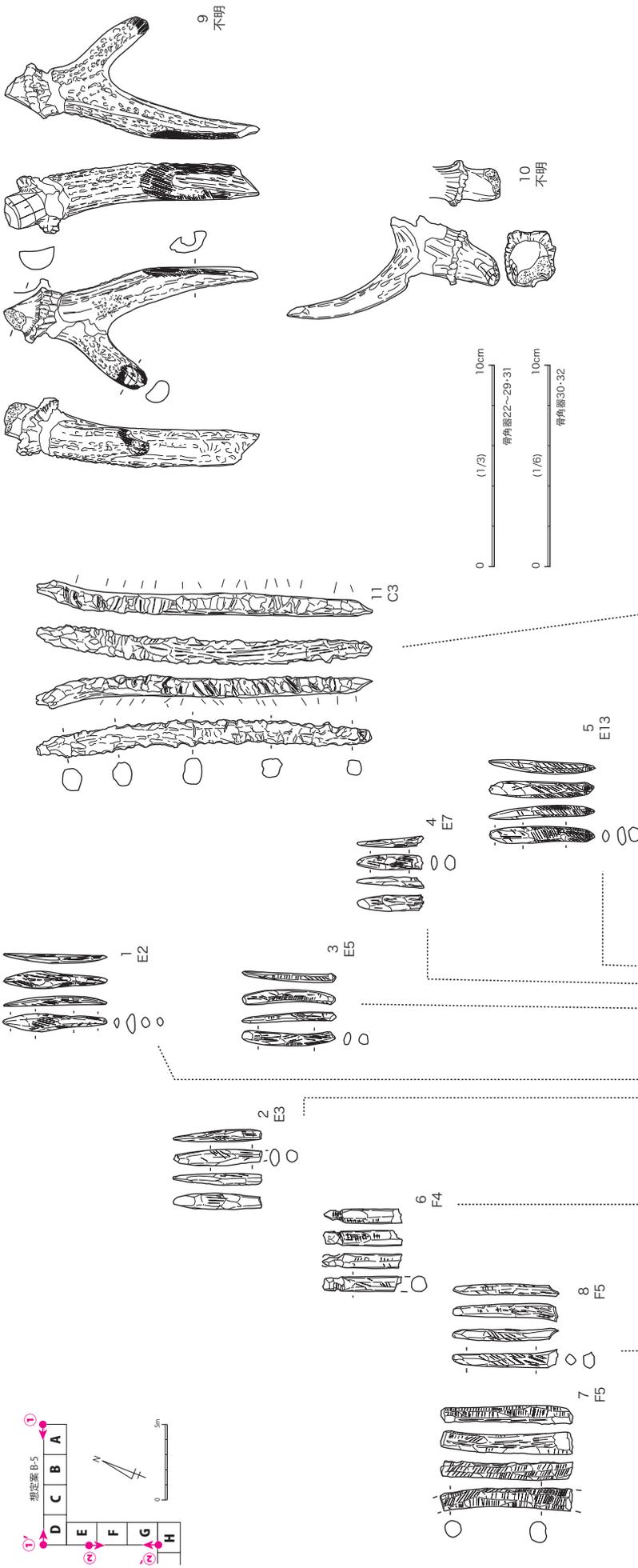


図 14 天神山遺跡 骨角器の出土様相

記録を参考とすると、図 13 下の注記のようになる可能性が考えられる。今後、各方面からのさらに検討の進むことが望まれるところである。

図 14 は、筆者が調査をした骨角器資料を配列したものである。図 14-9・10 の鹿角斧については出土区・層位は不明であるものの、ペン先形刺突具・釣針などの利器（図 14-1～8）に関しては E 区・F 区出土が集中しており、装身具・儀器と思われる鹿角製品（図 14-11）のみがやや離れた場所で出土している。11 自体、何か特別な意味を有していた可能性が、この出土地点の差として表出しているかもしれない。（川添和暁）



写真 9 鹿角斧（図 14-9）出土状態（磯部幸男氏撮影）

#### 掲載土器出典

図 9-2：高橋雄三・吉田哲夫 1977 「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物」調査研究集録第 2 冊。

図 11-25：増子康真・長江洋一 1995 『クダリヤマ遺跡』稲武町教育委員会。

図 11-28：吉田英敏 1979 『港町岩陰』美濃市教育委員会。

図 11-29.30：豊田市 2013 『新修豊田市史 18』。

図 11-31～34.47：大参義一ほか 1991 『小の原遺跡。戸入障子暮遺跡』岐阜県教育委員会。

図 11-35：岐阜県文化財保護センター 1997 『山手宮前遺跡』。

図 11-37：名古屋市教育委員会 2018 『大曲輪遺跡』。

図 11-46：名古屋市見晴台考古資料館編 1993 『名古屋の縄文時代資料集』。

図 11-48：長田友也 2019 『今朝平遺跡』豊田市埋蔵文化財調査報告書 79 集。

図 12-1～10.12～23：守矢昌文 2000 『買地遺跡』茅野市教育委員会。

図 12-11：守矢昌文ほか 1990 『芥沢遺跡』茅野市教育委員会。

図 12-24～36：神奈川考古同人会編 1983 『シンポジウム '83 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 土器資料集成図集』。

#### 図化資料の所在

図 14-1～11：名古屋大学博物館

## 参考・引用文献

- 泉拓良編 2005 『山内清男考古資料集 15』奈良文化財研究所
- 磯部幸男・杉崎章・久永春男 1965 「知多半島南端における縄文早期末～前期初頭野遺跡群」『古代学研究 41』古代学研究会
- 磯部幸男 1984 「塩屋遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究 1』知多古文化研究会
- 上峯篤史編 2022 『天神山遺跡』南山大学 上峯篤史研究室
- 大参義一 1961 『八ッ崎の貝塚』刈谷市教育委員会
- 岡本勇 1962 「吉井城山貝塚」『横須賀市立博物館研究報告 6』
- 岡本勇 1970 『下吉井遺跡』神奈川県教育委員会
- 小澤一弘・川添和暁 2018 「南知多町天神山遺跡の調査メモについて」『研究紀要 第 19 号』愛知県埋蔵文化財センター
- 各務原市埋蔵文化財センター 1999 『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』
- 神奈川考古同人会編 1983 『シンポジウム '83 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 土器資料集成図集』
- 川添和暁 2018 「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」『考古学フォーラム 24』
- 紅村弘 1963 『東海の先史遺跡 総括編』名古屋鉄道株式会社
- 小松学ほか 1994 『矢口唐沢南遺跡』塩尻市教育委員会
- 澁谷昌彦 1981 『木島 静岡県富士川町木島遺跡第 4 次調査報告書』富士川町教育委員会
- 澁谷昌彦 1994 「土器型式より見た縄文早期と前期との境について」『第 7 回縄文セミナー 早期末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 澁谷昌彦 2006 「坂平式土器の設定」『長野県考古学会誌 118 号』長野県考古学会
- 坪井清足ほか 1956 『石山貝塚』平安学園考古クラブ
- 立松宏・山下勝年 1983 「愛知県天神山遺跡の縄文早期土器」『古代人 41』名古屋考古学会
- 中山英司・稲垣晋也 1955 『入海貝塚』東浦町教育委員会
- 永井宏幸ほか 2004 『長谷口遺跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 126 集
- 坂野俊哉ほか 2005 『楠廻間貝塚』知多市教育委員会
- 樋口誠司ほか 2004 『坂平』富士見町教育委員会
- 廣瀬允人 2021 「愛知県南知多町天神山遺跡出土の縄文早期末頃の動物遺存体群」『あいちの考古学 2021 資料集』51～52 頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 堀内祐花・須賀永帰 2021 「南知多町天神山遺跡の縄文土器」『あいちの考古学 2021 資料集』49～50 頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 増子康真 1983 a 「八ッ崎 I 式土器をめぐって」『古代人 41』名古屋考古学会
- 増子康真 1983 b 「入海式土器の再検討」『古代人 42』名古屋考古学会
- 増子康真 1999 「列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望-東海地方前期」『縄文時代 第 10 号第二分冊』縄文時代文化研究会
- 増子康真 2006 「楠廻間式から塩屋式土器へ」『伊勢湾考古 20』知多古文化研究会
- 百瀬一郎 2007 『芥沢遺跡 II』茅野市教育委員会
- 守矢昌文ほか 1990 『芥沢遺跡』茅野市教育委員会
- 守矢昌文 2000 『買地遺跡』茅野市教育委員会
- 山下勝年 1989 「所謂、石山式土器の再検討」『伊勢湾考古 5』知多古文化研究会
- 山下勝年 2003 「天神山式の終焉と塩屋式土器の成立」『伊勢湾考古 17』知多古文化研究会
- 山下勝年 2006 「塩屋式土器の細分」『古代人 66』名古屋考古学会
- 吉田富男 1954 「入海貝塚の思出」『郷土文化 9 巻 2 号』
- 渡邊誠・村田文夫 1966 「新作 D 地点貝塚発掘調査報告」『川崎市文化財集録 2』

# 設楽町川向東貝津遺跡出土の 礫器についての再検討 ～縄文時代の礫器について～

● 田中 良

設楽町川向東貝津遺跡から出土した礫器について、再分類を試みた。その結果、27点中24点が石核となった。石核は、剥片剥離を一方向ないし二方向から行う一群(a・b群)と周縁から行う一群(c群)に分類できる。これらの石核に共通しているのは、礫形状大きく変えない程度の剥片剥離作業で終了している点と、作出された剥片は、剥片石器として加工されない点である。また、礫器とした1点には、潰れが認められた。

## 1. はじめに

現在、設楽町では設楽ダム建設に関連して、大規模な発掘調査が継続して行われている。それにより、縄文時代の遺跡が数多く発見されている。それらの遺跡から多く出土するのが、在地石材である安山岩製の石器である。特に、ガラス質で、赤灰色の層状あるいは脈状が確認できる安山岩が大量に使用される(安山岩B類)。この安山岩は、設楽町付近に広く分布する「設楽火山岩類」に伴う安山岩である(堀木2019)。この安山岩は、硬く緻密で、打欠くと鋭利な縁辺を作出できるため、スクレイパーや刃器類、打製石斧など幅広い器種に利用されている。設楽地域の縄文時代人の営みを考える上で、非常に重要な石材である。しかし、風化面の摩耗が著しいことや加工の頻度が他の剥片石器に比べて低いことなどから、漠然とした捉え方しかされてこなかった。

設楽町マサノ沢遺跡の整理作業の際、長田友也氏から、「礫器と分類されているものの中に、石核と考えられるものがある」と指摘された。一見すると、縁辺に両面から加工を施し、鋭い刃部を形成するような剥離痕が認められるが、使用痕のような潰れや摩耗は認められない。むしろ、連続した剥離作業面が片面に認められた。

こうして得た知見のもと、改めて既報告の資料を再検討する必要があると考え、今回川向東貝津遺跡の礫器を再分類し、分析を試みる。

## 2. 川向東貝津遺跡の概要と分析

分析の前に、川向東貝津遺跡の概要について簡単にまとめる。

遺跡は設楽町川向に所在し、境川右岸の台地上に立地している。遺跡の南西には境川が流れている。縄文時代中期後半の竪穴建物跡4棟や後期の竪穴建物跡2棟などがあり、中期後半から後期前葉までの集落跡が確認されている。また、集石土坑や陥し穴は早期まで遡る。それら縄文時代の遺構より下層からは、縄文時代草創期と後期旧石器時代の遺物集中地点が検出されている(樋上2020)。

今回分析する礫器は、礫器として報告されている27点である。時期幅がかなり広いが、対象の遺物は縄文時代遺構面よりも上位から出土しているため、草創期以降の所産である可能性が高いものである。石材は安山岩が25点(A類1点、B類9点、C類1点、D類13点、E類1点)、凝灰岩が2点となっている。どの石材も遺跡周辺で採取可能であり、安山岩は他の石器にも多用されている。

再分類した結果、石核24点、剥片1点、礫器1点、礫片1点となった。ほとんどが石核という結果になったが、それらには共通点が認められるため、それを中心に分析を試みる。

石核として分類した24点には、剥片剥離を一方向からのみ行う一群(a群)と、二方向から行う一群(b群)、周縁から行う一群(c群)の3種類認められる。また、それぞれに原礫面を作業面にする個体と、打面を平坦にする調